

養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1974

養命酒製造株式会社
養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会

養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡
—緊急発掘調査報告書—



復元住居（上—縄文時代、下—平安時代のもの）

序

先般、駒ヶ根市大徳原地籍に当社駒ヶ根工場を新設するに当たり、建設工事の着工に先立つて昭和46年6月、駒ヶ根市教育委員会に用地内の埋蔵文化財の調査をお願いしました。

調査は、市教育委員会による基礎調査に統いて、駒ヶ根市教育長北澤照司氏を会長として「養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会」が結成され、上伊那考古学会会長友野良一氏を団長とする調査団によって約1か月にわたり行われました。

その結果、縄文早期から平安前期にかけての住居跡、土器類が多数発見され、その貴重な内容がここに報告書としてまとめられた次第です。

工事予定等の関係から、限られた期間での緊急調査となりましたが、ご多用の中をさして終始ご尽力賜りました北澤会長、友野団長はじめ調査員の諸氏、市教育委員会、市博物館、また発掘調査に参加下さった地元の方々のご厚意に対し、心から厚くお礼申し上げます。

大徳原高原は、中央アルプスの山すそに位置し、空気・水・気候・風土等。いわゆる高原地特有のさわやかな自然的条件を備えており養命酒の生産環境としても好適な場所となっておりますが、かつてこの地において数千年の昔から人々が生活を営んでいた模様がこのたびの調査において一段と鮮明になり、このような由来の地で伝統の養命酒が生産されることなど思い合わせると、まことに感慨深いものがあります。

出現した遺構等については、何らかの形で保存したいと考え、工場敷地の一隅に、友野団長のご指導により縄文中期住居及び土師住居を各一棟復元しました。また出土品についても工場内に常時展示して、それぞれ供覧に付したいと考えております。

ここに至りますまで、種々ご尽力いただきました諸先生方、ご関係の方々に重ねてお礼申し上げますとともに、この報告書が期界の方々への参考資料としてお役に立つことを念願する次第です。

昭和48年3月

養命酒製造株式会社

発刊にあたって

辻沢川の両岸地域には、縄文時代草創期から現代に至るまでの各年代にわたる遺跡が多数あるということで、辻沢遺跡群研究会の方たちが会組織で活動する20年も前から、同好の方たちによって研究が進められていました。

そうした地域の一角に敷地面積305,000m²・建物延面積37,800m²というこの地方としては、すこぶる大きな養命酒工場が新設されることになり、昭和46年6月から建築工事が進められる予定になっていましたが、過去における調査研究などを耳にされた養命酒製造株式会社では、6月10日に施設部の山岸部長・平林課長さんを通じて遺跡発掘調査依頼書を市教育委員会に提出されました。

6月13日から友野良一先生を団長として分布調査を開始、17日には養命酒駒ヶ根遺跡調査会を結成。友野良一先生を団長として多数の方々の協力の下で広大な地域の発掘調査が始まりました。

会社の建設予定を遅延させない様に、目的を果す様にとの懸命な発掘調査が進められました。

発掘調査の結果については、友野・林両先生をはじめ各調査員の先生方が詳細に記述されておりますのでご承知願うとして、この発掘調査事業に対する養命酒製造株式会社の実に寛大なご処置即ち、発掘調査費一切を負担されたこと、工事着手が実際には遅延されたにもかかわらず、ご叱責もなく進めさせて下さったこと、その上養命酒創始の祖宗開翁の像近くに平安時代の住居を更に統いて縄文時代の住居を復元して古い時代にここに住んでいた人々の生活をしのぶよすがを残されたこと等々のご処置を賜りましたことについて深甚の敬意と感謝を捧げ、養命酒工場の新設とともに、養命酒製造株式会社の御発展を祈念しています。

林顧問・友野団長さんをはじめ調査団員の方々、調査にご協力くださった大勢の方々、ご指導をいただいた先生方のご協力に厚くお礼申し上げて、考古学関係の方々の宿望が達成された喜びを共にいたします次第です。

昭和48年10月

養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会

会長 北澤照司

凡　　例

1. この報告書は養命酒製造株式会社の駒ヶ根工場建設に伴う、緊急発掘調査に基づくものである。
2. この調査は養命酒製造株式会社の委託により、養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会が実施した。
3. 本文は、調査員が分担して執筆した、文責は文末に記してある。
4. 造構関係の図面は山田午が整図した。ドットは範士を表わしている。
5. 土器の拓影及び実測は小池政美が担当した。
6. 石器実測は吉村進が担当した。
7. 土器復元は福沢幸一氏にお願いした。
8. 写真撮影は友野良一・福沢正陽・吉村進が担当した。
9. 編集は吉村進が主として当たった。

目 次

序

発刊にあたって

凡 例

目 次

挿 図 目 次

図 版 目 次

第Ⅰ章 遺跡の環境	1~6
第1節 位 置	1
第2節 地形及び地質	1
第3節 歴史的環境	4
第Ⅱ章 調査の経緯	7~16
第1節 発掘調査に至るまでの経過	7
第2節 調査会の組織	9
第3節 分布調査及び発掘調査作業経過	11
第Ⅲ章 発掘調査	16~55
第1節 調査概要	16
第2節 遺構及び遺物	20
第Ⅳ章 ま と め	55~60
図 版	61~107

挿 図 目 次

第 1 図	義命酒駒ヶ根工場用地内遺跡の位置図	1
第 2 図	義命酒遺跡の地形図（折り込み）	2
第 3 図	駒ヶ根市付近竜西の地質図	3
第 4 図	中田切川左岸段丘上の地層図	4
第 5 図	付近の遺跡分布図	5
第 6 図	第 I ~ IV 区遺構図	17
第 7 図	第 V ~ VI 区遺構図	18
第 8 図	炉址状遺構実測図	19
第 9 図	焼石炉火実測図	20
第 10 図	第 1・2 号小窓穴実測図	21

図版 33	第2号上墳と第1号マウンド	83
図版 34	第1号マウンド	83
図版 35	第2号マウンド	83
図版 36	第3号マウンド	83
図版 37	第4号マウンド	85
図版 38	第4号マウンド	85
図版 39	第4号マウンド	85
図版 40	第5号マウンド	87
図版 41	第6号マウンド	87
図版 42	遺物出土状態	89
図版 43	石器出土状態	91
図版 44	出土土器（縄文時代早期第Ⅰ群）	93
図版 45	出土土器（縄文時代早期第Ⅱ群）	95
図版 46	出土土器（縄文時代中期第Ⅱ群）	97
図版 47	出土土器（縄文時代中期第Ⅲ群）	99
図版 48	出土土器（縄文時代前期）	101
図版 49	出土土器（弥生時代）	103
図版 50	出土土器（平安時代）	105
図版 51	出土土器（平安時代）	107

第1章 遺跡の環境

第1節 位 置

当遺跡は駒ヶ根市赤穂福岡区大徳原地籍に所在する。国鉄飯田線伊那福岡駅より西へ約3.5km、中田切川の左岸に位置し、標高800mほどである。



第1図 美命酒駒ヶ根工場内用地遺跡の位置図 ($S=1/100,000$)

第2節 地形及び地質

伊那谷は長野県の南部にあたり、東に赤石山脈、中央構造線をはさんで、戸倉山・高鳥谷山を始めとする前山の伊那山脈が並行して走る。西には木曾山脈があり、天竜川をはさんで南北に並走する。

この両山脈の平均距離は約 18km を測る。その傾斜角度は木曾山脈で平均 26.5%，伊那山脈の西側で平均 14.7% を測り、木曾山脈側よりややゆるやかな勾配である。

天竜川より傾斜変換線である山麓までの平均幅は、駒ヶ根市付近で竜西 5.8km，竜東地域では 1.3km，傾斜率は、竜東側が竜西側に比して約 2 倍の 7.7% を示す。

天竜川は当市付近にあっては、伊那山脈寄りを流れる。その河岸段丘の比高は約 40m である。現況河床勾配は 4% を測る。

伊那盆地は、沖積世以前の高峻なる両山脈の断層により土砂の過剰堆積は山麓に大小いくつかの扇状地を形成した。木曾山脈駒ヶ岳に源を発する大田切川は延長 19km，河川の幅平均 500m，段丘の比高 30~40m，その最大洪水量 764m³，扇状地の幅平均 6km である。赤穂地区の中央部から北部にかけてはこの大田切扇状地によって占められている。

赤穂地区の南部は空木岳及び南駒ヶ岳に源を発する中田切川による扇状地である。中田切川の流路の長さは 10km，河川の幅 180~250m，段丘の比高は 49~60m を測り、最大洪水量は 300m³ である。扇状地の面積は 15km²，北は上穂沢川にて大田切扇状地に複合し、南は飯島町田切地区全域に及んでいる。

駒ヶ根赤穂地区は北に大田切川、南に中田切川が東流し、共に行政区画をなしている。この両大河川の間を小河川が東流し、起伏に富んだ地形を造っている。北より古田切川、鼠川、上穂沢川、如来寺川、辻沢川がある。

赤穂地区の大方の遺跡はこれら小河川の左右岸に分布する。

本遺跡の所在する付近の地形をやや詳細にみてみるとこととしよう。

本遺跡は中田切川の左岸にあり、西方の崖壁上は大徳坊森上という地名で、縄文時代早期及び中期の遺跡である。また 10 年ほどまえ、林道工事中に須恵器なども出土したと聞く。

大徳坊森上を含め琴ヶ沢・観音沢の南面する地帯は崖壁断層地帯で、平坦地を形成している。この崖壁地帯が本遺跡の形成にあらゆる面で重要な役割を果していることはいうまでもない。

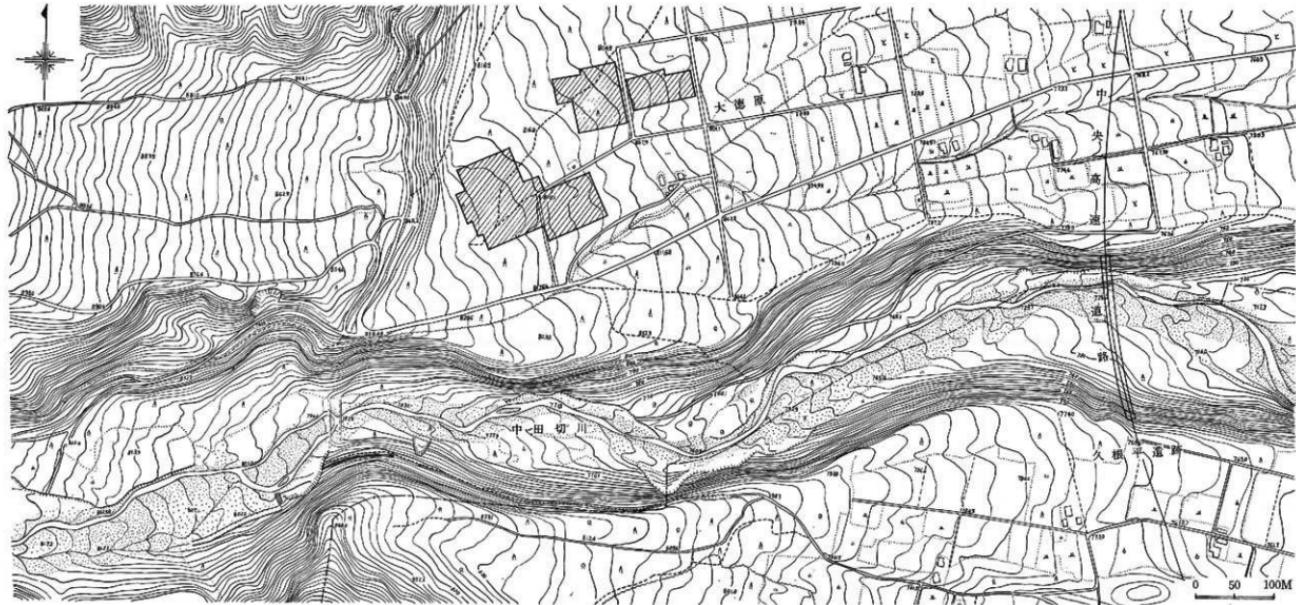
辻沢川は標高 840m 磐ヶ沢の大崩壊末端部より發し、それが本遺跡付近にて湧水を集め小河川をなし、福岡落として福岡部落の重要な水資源となっている。辻沢川の左右岸地域は中央道大徳原遺跡を初めとして数多くの遺跡が分布する。

大徳原地帯は駒ヶ根市赤穂の未開地であったが、近年急速な開発の波におそれ背の面影をしのぶことができないほどに変わってきている。

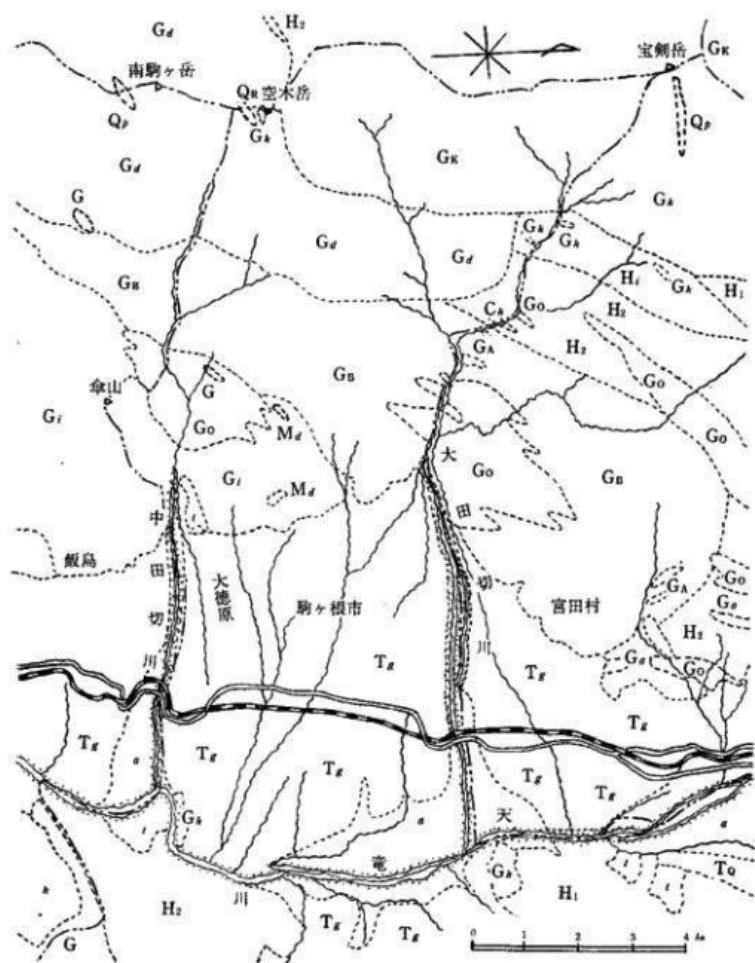
木曾山脈の地質構造は内帯に属し、主として花崗岩と古成層の変成された黒雲母粘板岩で代表され、他に弱変岩・黒雲母片岩・織状片麻岩からなる。花崗岩は木曾駒ヶ岳の南部に露出しそのなかには、ホルンヘールス・黒雲母片麻岩がとりこまれている岩質構造である。赤穂地区的地質構造は、領家花崗岩のみで岩石質は斑状花崗閃緑岩・織状片麻岩・麥光綠岩・中粒黑雲母花崗岩・細粒黑雲母花崗岩等の岩石によって基盤疊層は形成されている。その上に新期ロームが堆積している。

養命酒工場敷地内でのボーリングの結果は次のとおり（第 4 図）である。

表上は 30~60cm、ローム層 60~100cm、それより下部 13m まで巨礫混じり砂疊層、13~41m



第2図 黒部道の地形図 ($S= \frac{1}{5000}$)



Q_d 石英斑岩～石英班岩, G_x 中粒花崗閃綠岩, G_a 斑狀花崗閃綠岩, G ジョートランド岩～はんれい岩, G_c 織状片麻岩帶, G_s 中粒～細粒黑雲母花崗岩, G_i 細粒黑雲母花崗岩, H₁ 片狀ホルンフェルス帶 I, H₂ 片狀ホルンフェルス帶 II, G_m 中粒黑雲母花崗閃綠岩, a_g 蘆および粘土, T_g 砂, および粘土, G_k 中粒花崗閃綠岩

第3図 駒ヶ根市付近竜西の地質図 (S=1/100,000)

までは転石混じり砂疊（粘土混じり）層、41~49mは砂疊（粘土混じり）層、49~73mは転石混じり砂疊（粘土混じり）層、73m以下は花崗岩に達している。

第3節 歴史的環境

昭和28年に行った赤穂地区の遺跡の分布調査によると、遺跡数77か所、遺物出土点230か所に及んでいる。近年分布調査が進むにつれて遺跡数も増加する傾向にある。

赤穂地区における遺跡の分布状態をみると、大部分の遺跡が東流する小河川に沿って分布している。

中でも上総沢川沿岸は大遺跡群を形成している。近年発掘調査を行った中山原・春日・藤助畠・北方・湯原・大城林・羽場下・舟山などの遺跡はこの遺跡群に含まれるものである。

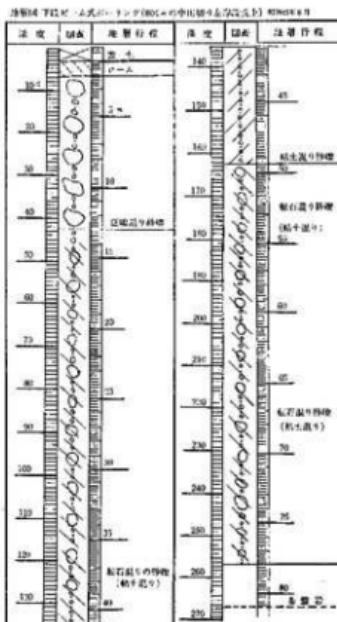
これについて遺跡の分布の多いのは、辻沢川沿岸である。辻沢川は古くは中田切川の支流であったが中田切川の浸蝕が激しくなったため、自然流路化したもので先人の生活舞台として、最適な場所となつたと考えられる。

以上が本遺跡を取り巻く遺跡の分布状態であるが、ここで関係の深い周辺の遺跡をやや詳細にみてみたい。

1. 大徳原南B遺跡 小松原氏宅の南西中田切川の段丘上に発見された遺跡である。出土遺物は縄文時代中期のものである。昭和47年中央道埋蔵文化財調査団の手によって遺跡の上端一部が発掘された。遺構は発見されなかつたが、縄文時代中期・後期の遺物が検出されている。

2. 大徳原南A遺跡 大徳原南B遺跡の北に位置する遺跡である。遺跡は宿間落しに沿つた東西に細長い遺跡である。現在畠と一部宅地になっている。中央道がこの西端部を通過するため、調査を行つたが、遺構は発見できなかつた。

3. 大徳原北遺跡 本遺跡は大徳原の平坦部にあり、豊富な湧水に恵まれた遺跡である。塩沢界氏の宅地となっている。付近の畠から縄文時代中期の土器および石器、弥生時代後期の遺物が発見されており、山麓に近く弥生文化を考える上に重要な遺跡である。中央道通過に伴い、調査を行つた結果、遺構の発見はなかつたが縄文時代後期・晚期の遺物が発見された。養命酒工場内遺跡の北を流れる河川に沿つた湿地帯に縄文時代後期・晚期、弥生時代の遺跡が集中し、しかも山麓に近いといふところに今後の問題が残る。



第4図 中田切川左岸段丘上の地層図

4. 大徳原東北の遺跡 大徳原北遺跡の東 250~300m の位置にある。現在は大部分が墓地となっている。未発掘のため遺跡の性格は明らかでないが、縄文時代中期・後期、弥生時代の土器が出土している。

5. 大徳原遺跡 遺跡の中央を養命酒駒ヶ根遺跡の北を流れる河川が通る。中村氏宅付近より打製石斧が数多く発見されている。また付近の開田の折、木炭と縄文時代中期、弥生時代の土器が集中して発見されている。下流には縄文時代後期・晩期、弥生時代の遺跡が多く注目される。

6. 十二天遺跡 昭和 32 年太田保氏によって調査された遺跡である。遺構は確認されなかつたが、縄文時代中期・後期の土器片 376 片と打製石斧、石錘、石匙、石棒、石皿等多数の石器が採取されている。

7. 作左ニ門遺跡 昭和 28 年の分布調査の折発見された遺跡である。ここは赤嶺公民学校の実習地があったところで、その入口の北側道路端に土師式の住居址が発見され、その付近一帯には遺物の



1 大徳原南 B 遺跡 2 大徳原南 A 遺跡 3 大徳原北遺跡 4 大徳原東北の遺跡 5 大徳原遺跡 6 十二天遺跡 7 作左工門遺跡 8 大原遺跡 9 辻沢北遺跡 10 辻沢南遺跡 11 簡沢遺跡 12 横前南遺跡 13 福ヶ沢堂ヶ入遺跡

第 5 図 付 近 の 遺 跡 分 布 圖

散布がはなはだしく、林の中の各所に焼石が見うけられた。

8. 大原遺跡 昭和28年の分布調査によって発見された。当時は駒ヶ根教会があった。遺跡は辻沢川の左岸南傾斜面に位置する。調査は行ってないが、牧師であった波瀬正夫氏によって遺物が採取されている。縄文時代中期・弥生時代の土器をはじめ、土師器、須恵器が出土している。

9. 辻沢北遺跡 辻沢川の左岸、富士山・大手・大城林・十二犬と続いてくる段丘上にある。縄文時代早期押形文土器をはじめ、縄文時代前期・中期の遺物が出土している。

10. 辻沢南遺跡 辻沢北遺跡と辻沢川をはさんで対し、遺跡は段丘の上と下とにある。段丘上は押型文土器をはじめ縄文時代中期の大遺跡である。段丘下は縄文時代中期と平安時代の複合遺跡で、一部は昭和45年に発掘調査が行われ、縄文時代中期の住居址が2軒発見されている。

11. 筒沢遺跡 国道153号線の東、辻沢川の末流、低位段丘上に位置する。縄文時代早期押型文土器をはじめ縄文時代中期の遺物が発見されている。

12. 横前南遺跡 南割、横前新田にあり、一部は中央道の敷地となり調査が行われた。縄文時代中期・後期の土器が出土している。遺跡の主体は東にあると思われ、開田中に住居址が確認されている。

13. 鏡ヶ沢堂ヶ入遺跡 中田切川左岸にあり、養命酒駒ヶ根遺跡の西方崖錐上に位置する。昭和28年5月林道の工事中に発見された。標高は約930mである。遺構等の確認はできなかったが、遺物としては灰釉陶器が出土している。

この東方、崖錐突端部からは縄文時代早期の押型文土器が出土しており今後の研究が待たれる。

以上養命酒工場内遺跡をとりまく周辺の遺跡を述べてきた。なおこの付近には仏教関係の地名も多く所在し、今後の研究にまちたい。(友野良一)

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡は、地元の熱心な研究者の集団である辻沢遺跡群研究会の人々の手によって発見されたのである。

昭和45年会が発足して以来、辻沢川沿岸の遺跡の表面採集を続けていた会員たちは、ある日、数年前に山林を切り開いて造られた牧草畑の切り通しから一片の押型文土器を採集した。

それから約1年、山紫永明のこの地に工場建設を進めていた養命酒製造株式会社の駒ヶ根工場建設が始まることとなり、それに先立って用地内の分布調査の実施を市教育委員会へ依頼してきた。

そこで市教育委員会は博物館を中心に、辻沢遺跡群研究会の応援を得て分布調査を昭和46年6月13日に実施した。

その結果、土師式土器片、石器を更に発見の端緒となった牧草畑からは押型文土器を初め、石器を発見することができた。

これに基づいて会社側と協議し、工場建設前に正式な発掘調査を実施することになった。

6月17日養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会（略称養命酒駒ヶ根遺跡調査会）を発足させ、その中に調査団を含めて記録保存事業を進めるとした。

その後、発掘調査に要する諸手続を行つ一方、調査団の編成にあたり、6月24日より発掘調査を実施した。その間予定地の分布調査を23日まで行った。

記録保存事業を行うため、養命酒製造株式会社代表取締役塙沢総氏と養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会会长北澤照司（以下「乙」という）との間に次のとおり委託契約を締結した。

埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書

養命酒駒ヶ根工場用地内における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査実施に関する業務について、委託者養命酒製造株式会社代表取締役塙沢総（以下「甲」という）と受託者養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会会长北澤照司（以下「乙」という）との間に次のとおり委託契約を締結する。

（総則）

第1条 乙は別紙の発掘調査実施計画書に従つて、業務を実施するものとする。

2 乙は業務の実施に必要な土地所有者等の承諾を取りまとめるものとし、かつ法令の規定に基づく諸届出等を甲に代わって行うものとする。

（期間）

第2条 乙は昭和46年7月31日までに現場における発掘作業を終了し、昭和48年10月31までに業務を完了するものとする。

(費　用)

第3条 甲が業務に関する費用として、乙に支払う金額は260万円以内とする。但し上記金額は現場作業及び整理に関する費用であり、報告書代金は除くものとする。

2 前項の費用の支払い方法については、乙の業務に支障のないよう甲・乙協議して定める。

3 甲は乙からの費用請求に対して、すみやかにこれを支払うものとする。

(作業の実施)

第4条 乙は業務の実施に当たっては、甲の施行する作業の工程に支障のないように努めるものとする。

2 乙は業務の実施に当たっては、作業箇所に作業旗を掲げ、関係者に腕章等を着用させるものとする。

(作業日誌)

第5条 乙は発掘の実施中、作業日誌を作成し、甲はその提示を求めることができるものとする。

(出土品の取扱い)

第6条 発掘された出土品の処置については、甲・乙協議のうえ、法令の定めるところにより、処置するものとする。

(決算および精算)

第7条 乙は業務が完了したときは、業務に関して要した費用について、決算を行い決算書を甲に提出するものとする。

2 甲は前項の決算書の提出を受けたときは、当該決算書に基づき、第3条により約定した金額の範囲内において、乙と協議して、精算を行うものとする。

(発掘調査報告書)

第8条 乙は業務が完了したときは、発掘調査報告書を添えて発掘調査完了報告書を甲に提出するものとする。

但し、発掘調査報告書代金は全額会社負担とし、別途請求とする。

(協　議)

第9条 この契約に定めのない事項または、契約の事項について、疑義を生じた場合は、甲・乙協議して定めるものとする。

この契約締結の証として、契約書2通を作成し、甲・乙それぞれ署名押印のうえ、各自1通を保有する。

昭和46年6月17日

甲 東京都渋谷区南平台町16番25号
義命酒製造株式会社

代表取締役 塩沢 総 @

乙 駒ヶ根市赤穂1,078番地の2
義命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会
会長 北澤照司 @

第2節 調査会の組織

養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会規約

(目的)

第1条 この調査会は、養命酒製造株式会社の委託を受けて、養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用方法を研究することを目的とする。

(名称)

第2条 この調査会は、養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡（略称養命酒駒ヶ根遺跡）調査会（以下「調査会」という）と称する。

(組織)

第3条 調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

- (1) 会長 1名
- (2) 理事 若干名
- (3) 監事 2名

(事務所)

第4条 調査会の事務所は、会長が別に定める。

(会長及び理事)

第5条 会長は駒ヶ根市教育委員会教育長をもってあてる。

2 理事は会長の委嘱した者をもってあてる。

(会長及び理事の職務)

第6条 会長は、調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2 理事は、理事会を構成し、必要な事項を審議する。

3 会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、職務を代理する。

(理事会の招集)

第7条 理事会は必要に応じて会長が招集する。

2 理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3 前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意思表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は、出席したものとみなす。

4 理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(顧問)

第8条 調査会に顧問を若干名置くことができる。

2 顧問は、理事会の推せんにより、会長が委嘱する。

3 顧問は、会長の請間に応ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

(監事)

第 9 条 監事は、理事会の推せんにより会長が委嘱する。

2 監事は、調査会の会計を監査する。

(役員の任期)

第 10 条 役員の任期は 1 年とする。ただし、その職にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

(幹 事)

第 11 条 調査会に幹事若干名を置く。

2 幹事は、会長が委嘱する。

3 幹事は、会長の命をうけ調査会の事務を処理する。

(調 査 団)

第 12 条 調査会に調査団を置く。

2 調査団の組織及び運営については別に定める。

(事務の管理執行の規定)

第 13 条 調査会の事務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行う。

(経 費)

第 14 条 調査会の事業に要する経費は、養命酒製造株式会社の委託料をもってあてる。

(会計の区分)

第 15 条 調査会の会計年度は、昭 46 年 6 月 17 日にはじまり、翌年 3 月 31 日におわる。

2 調査会の会計は、養命酒製造株式会社と締結した委託契約ごとに区分して行う。

(出納及び現金の保管)

第 16 条 調査会の出納は、会長が行う。

2 調査会に関する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、他の金融機関にこれを預け入れなければならない。

(決 算)

第 17 条 会長は、会計年度終了後 1 か月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て、理事会の認定を経なければならない。

(委 任)

第 18 条 調査会の業務に必要な事項は、この契約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほかは会長がこれを定める。

(付 則)

この規約は昭和 46 年 6 月 17 日から施行する。

養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会役員名簿

顧 問 気賀沢 治 夫 (市教育委員長)

会 長 北 澤 照 司 (市教育長)

理 事 小 池 金 義 (市博物館長) (会長職務代理)
 " 字 田 堅 治 (市商工観光課長)
 " 木 下 義 男 (市文化財調査委員会会長)
 " 下 村 忠 北 古 (市文化財調査委員会副会長)
 " 小 林 浜 夫 (大徳原開拓組合長)
 " 西 村 光 広 (辻沢遺跡群研究会会長)
 " 羽 生 豊 (大徳原自治組合長)
 " 宮 沢 五 郎 (赤穂公民館福岡分館長)
 監 事 池 上 重 雄 (市文化財保存会会員)
 " 氷賀沢善右衛門 (駒ヶ根郷土研究会会長)
 " 山 岸 利 一 (養命酒製造株式会社施設部長)
 幹 事 福 沢 正 陽 (駒ヶ根市立駒ヶ根博物館)
 " 武 藏 法 子 (")
 " 細 田 繁 子 (")
 事 務 所 駒ヶ根市赤塚 2423-6 駒ヶ根市立駒ヶ根博物館内

○調査団

顧 問 林 茂 樹 (日本考古学协会会员)
 団 長 友 野 良 一 (長野県考古学会会員)
 調 査 員 太 田 保 (")
 " 御子柴 泰 正 (")
 " 本 田 秀 明 (")
 " 山 田 年 年 (")
 " 小 池 政 美 (")
 " 吉 村 進 (明治大学学生)
 特別調査員 根 津 清 志 (長野県考古学会会員)
 " 福 沢 幸 一 (")
 調査補助員 北 沢 雄 喜 (")
 " 田 中 清 文 (")
 " 吉 沢 文 夫 (")
 指 導 金 井 欽 次 (県教委指導主事)
 " 桐 原 健 (県教委指導主事)

役職名、経歴名はすべて調査時のものである。

第3節 分布調査及び発掘調査作業経過

6月13日(日)晴 善命酒製造株式会社の要請により、博物館職員、辻沢遺跡群研究会会員で用

地内分布調査を始める。会社側の宮島氏の案内により、工場用地内の説明を聞いた後、午前9時より調査に入る。赤穂字大徳原 16410, 16411, 16413, 16425-1,2番地に1×2mのピットを13個設定する。用地内はすべて森林地帯であるため、表土はぎは相当手間取る。表土下30~40cmで砂質ローム層に至るが、流石が多く発見される。

縄文中期の土器片をわずか採集したのみで、午前中は終わる。

午後、以前大徳原開拓組合が表土をわずかに削って牧草畑とした所から土器片が2片採集される。さっそく付近を試掘すると、土器片と甌上を発見する。これ以上の調査は中断し、遺跡発見の端緒となつた牧草畑の南に調査地点を移す。

打製石斧1点と縄文時代早期の土器片を1片採集したのみで、午後5時40分作業を終了する。

6時過ぎより、館長、友野良一氏を中心本日の結果と今後の方法について協議する。

6月14日(月)晴 昨日の結果に基づいて今後の方策を協議するため、会社の山岸利一施設部長来市する。

午後より、山岸部長、林茂樹氏と共に現場へ出向き、対策を講ずる。

6月15日(火)曇 調査の実施方法について、教育長、商工観光課清水博人氏、博物館長、福沢正陽の4名、林茂樹氏の所へ出向く。

6月16日(水)晴 駅より金井汲次指導主事来市、館員と現地視察を行う。

6月17日(木)晴 大徳森下地蔵の山林伐採が進められているため、分布調査を再開する。

本日より古村進調査員をお願いして、作業員とともにグリット設定の測量に入る。

一方、契約書作成、調査会報成、規約等必要な事務関係について、事務局の手で進める。

6月18日(金)晴 午前中、発掘に必要な資材、器材等の調達を行う。午後、養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会を発足させ、調査会規約を前葉のとおり議決し、調査団、調査日程等について細部にわたって協議する。

調査会発足に伴い、今後は教育委員会経由でなく、調査会を中心にして一切の調査連絡を行うこととした。

現地においては、昨日に引き続いて測量を行い、グリット設定を行う。

現場が市街地より遠隔のため、会社の仮事務所の一棟を借用し、調査団本部と調査団員の宿泊所とした。

6月19日(土)晴 吉村進調査員を中心に一昨日米の測量に基づき、分布調査を行う。

一方、発掘調査実施計画書、予算書の作成を並行して行う。

更に調査員手配のため、館長原平遺跡で発掘を行っている小池政美氏の所へ出向く。

6月20日(日)曇 木の根や流石のため、分布調査も思うにまかせない。縄文中期や早期の土器片が断片的に出土する。

本日は日曜日とあって、高校生、辻沢遺跡群研究会員など多くの参加があった。

6月21日(月)雨 6月13日の調査で土師式上器を出土した付近の調査を行うも、午後10時頃より雨が強くなり作業中止する。

午後、会長と館長伊那建設事務所長の所へ出向き、友野良一氏を団長として長期派遣していただくよう要請する。

夕方7時過ぎ、かねて依頼しておいた小池政美氏が、調査に参加するため来市する。

6月22日(火) 曙のち晴 工場建設予定地は次第に伐採が進み、山麓地帯の全貌が見え始める。伐採した木は枝をはらって馬そりで運び出しており、現在では珍しくなった馬そりは、調査員をなごませてくれた。

O-D, I-D区を中心に縄文時代前期の土器がかなり出土した。

工場建設の記録撮影を依頼されている全国農村映画協会の人々が発掘調査の様子を撮影のため、27日まで滞在する。

6月23日(水) 晴 O-D区の西にグリットを設定し調査を行う。押型文上器を初め縄文早期の土器と石器がかなり発見される。その下部より住居址らしき落ち込みを確認する。

伊那建設事務所より所長代理として建設課長が来市し、調査団長としてお願ひしておいた友野良一氏を調査が終了するまで派遣するとの返事がある。

県教育委員会へ連絡の上、緊急発掘の手続きを行う。

夕方より調査団本部において、明日からの発掘調査の打ち合わせを遅くまで行う。

6月24日(木) 曙 本日より発掘調査に入る。昨日までの分布調査に基づき、O-D区とその西側付近を中心に表土剥ぎを行う。昨日発見された落ち込みはその結果、住居址と断定され、第1号として、一部精査を行う。床面を発見、拡張すると多量の炭化物が検出され、更に床面上より須恵器の环の破片が出土する。

一方、13日の分布調査の折、上部器や焼土の発見されたV-A区の調査も並行して行う。この付近は湿地帯のため調査は困難である。焼土のまわりには石が整然とみられることから、カマドとし、第2号住居址とする。南西側の壁を一部確認することができた。

6月25日(金) 晴 午前9時より発掘調査の鍛入れ式を行う。その後、会長始め参列者一同事務局の案内で発掘状況を見学する。

第1号住居址の精査を行う。土器器の旋形上器の完形品が伏さった状態で発見され、大いに意気あがる。カマドは石心粘土製である。覆土中には炭化物が多量にみられ、床面やや上より焼土と炭化材が発見され、火災にあったものと思われる。

更に覆土中より縄文早・前期の土器、石器が出土している。

第2号住居址のプランは隅丸方形、床面は軟弱である。

住居址の精査とともにグリットの調査も進める。縄文時代前期の土器出土するも遺構は確認できない。

6月26日(土) 晴 第2号住居址のカマドの精査と実測を行う。

新たにO-D区、O-E区、I-D区、I-E区のグリット調査を行う。遺構は発見されなかった。

6月27日(日) 曙のち雨 昨日に続きグリット調査を進める。第1号住居址の南東部に小さな落ち込みを確認する。

10時頃より雨降りのため、現場作業は中止し、本部で調査の打ち合わせを行う。

発掘面積が広く、その上、木の根などのためブルドーザーを搬入して表土剥ぎを行うこととする。

6月28日（月）曇夕方雨 本日よりブルドーザーにて一部表土剥ぎを行う。

I-B-6 グリット黒色土層より押型文土器、茅山系土器群が出土し、焼土も発見されるが、夕立のため作業は中止する。

6月29日（火）曇一時雨 I-B-6 グリットを中心に拡張行うも、雨のため作業は中止する。

本部にて、土器整理を行い、天候の回復を待て遺跡地遺景撮影に出向く。

6月30日（水）曇 ブルドーザーにてII～III区を横断するトレンチを入れて地層をみる。

O-C 区、I-C 区など遺物が出土したグリットの周囲の拡張を行う。

I-B 区の拡張、精査行う。焼土は約 1m 範囲にわたってみられ、周囲は流石が少ない。縄文早期の土器が出土する。

午後 4 時半より中間報告会を行う。

7月1日（木）曇のち雨 昨日に統いてグリット拡張する。

I-B-14 より焼石炉を発見する。更に O-D-13 より小堅穴が発見される。

7月2日（金）雨 早朝より雨降りのため、現場作業は中止し、出土遺物の整理行う。

7月3日（土）晴 一昨日同様、グリット調査。O-C-19 より土師器の环が出土する。遺構は発見されなかった。他のグリットよりは散発的であるが、縄文早期の遺物が出土している。

昨日発見された焼石炉の周囲より押型文土器出土する。

本日をもって第 I ~ IV 区の調査はほぼ終了して、約 100m 東の第 V 地点へ主力をそぐこととする。

7月4日（日）晴 本日より第 V 地区の調査に入る。地日が原野で茅などの根がはっているため、ブルドーザーによって 20cm ほど表土剥ぎを行い、北西隅を起点として 2m × 2m のグリットを設定する。

2-H グリットより押型文が、更に、1.2-J・2.3-K グリットを中心に条痕文土器が出土する。

更に 1~3-G・1~3-K に黒色土の落ち込みがみられる。

一方第 1 号住居址は清掃を終了し写真撮影を行う。更にその東はカマドらしき集石と焼土を発見し精査をする。

また焼石炉の調査も行う。内部より押型文土器が出土している。

7月5日（月）晴 第 V 地区の調査に全力をあげる。押型文土器と弥生時代の条痕文土器が出土する。

昨日発見された第 1 号住居址の東のカマド付近を拡張するも落ち込みなどは確認できなかった。

7月6日（火）晴一時雨 第 V 地区の縄文時代早期の遺物を出土する地域は限定されるようである。特別遺構の発見はない。

条痕文土器は散在するもほぼ全面にわたって出土している。周溝を持つマウンドが全面的に顔を見せる。調査の結果 7 基を数える。

市議会文教社会委員・会社の平林課長現地を視察する。

7月7日（水）雨 台風13号の影響による雨のため、現場作業は中止し、遺物整理に専念する。発掘調査が長引き、作業員にも疲労が見え始めているので、今後の調査方法について協議する。

7月8日（木）晴 各マウンドの精査及び清掃を行う。一方、グリットを新たに西へ伸ばすこととする。

15-A₆を中心に行き込みを確認、第3号住居址とする。

第I～V区の測量を始める。

会社の工場建設委員現地を視察する。

7月9日（金）晴 第3号住居址の拡張と一部精査を行う。更にこの南に第4号住居址を発見する。

測量も順調に進む。

7月10日（土）晴 第3号、4号住居址の精査を行う一方、焼石炉や遺構の実測も進める。

7月11日（日）曇 各地点の測量と写真撮影を主体に行う。

7月12日（月）小雨 第5号マウンドの清掃。雨が降るも作業が遅れているため、天幕を張つて測量を続行する。

更に焼石炉内部の調査も行う。

7月13日（火）雨のち晴 第V地区の全体測量を主に、マウンド等の残り分の調査行う。

上伊那地方事務所長・伊那警察署長・伊那建設事務所長等10名ほど視察に来る。

7月14日（水）晴 第V地区の西の第VI区の発掘調査に取りかかる。第VI区同様、2×2mのグリットを設定し、グリット掘りを行う。

7月15日（木）晴一時曇 昨日に引き続きグリット調査を行い、4軒の住居址を確認する。

第5号住居址は半分ほど調査を行う。

7月16日（金）晴 昨日に続いて住居址の調査を行う。各住居址とも擾乱がひどくプラン確認は手間取る。

残りの遺構の実測行う。

7月17日（土）晴のちにわか雨 第5～8号住居址の清掃、写真撮影、実測行う。

本日を持って発掘作業を終了する。

7月19日（月）曇 器材の撤収

7月23日より遺物整理に入る。

分布調査を含めると約40日という長期の、その上、梅雨期という悪条件の中での調査であったが、多大な成果をあげて無事終了することができました。

これもひとえに調査団員、養命酒製造株式会社の関係各位、中太興業、小沢建設、地元協力者を初めとする皆様のご協力とご配慮によるものと思います。とりわけ、友野良一氏を団長とする調査団の方々には、長期にわたってご指導いただき心から感謝の意を申し上げる次第です。 （福沢正樹）

発掘調査協力者（順不同）

内倉三夫 大林浩太郎 永井克己 気賀沢紀敏 気賀沢省三 小木曾企助 小椋好夫 大槻辰雄 木下竹松 土屋嘉之 赤羽根一夫 大林あや子 渡辺実子 松原とよみ 米沢たかえ 宮沢千代美 平沢まさゑ 赤羽根和恵 小林雪男 平沢正美 木下むら 大沢美枝子 竹上八重子 板木つま子 竹上久之助 小林きよみ 板木英雄 堀沢かめよ 堀沢義人 松村治雄 西村志をえ 武田いそ 宮沢孝子 小川きぬえ 気賀沢久夫 気賀沢一典 高島好三 高島幸敏 板木定一 和田武夫 北沢よし子 羽生実 羽生貞子 倉田一光 倉田源重 倉田正義 倉田武美 駒場和市 大野吉五郎 倉田日出平 田中健造 田中春子 渋谷富夫 北沢邦一 北沢しげ子 渋谷とし子 伊井島よし子 木下ちさ子 渋谷ふさ子 金村正子 松村ますみ 堀沢美江子 堀沢みさ子 気賀沢弥重 吹上千枝子 加藤とし子 長谷部重一 大前金次郎 川頭操 吉瀬美佐子 福沢巴 半松志め子 板間とめ子 代田ちえ 仁科光男 庄沢広美 小林きみよ 北村亀吉 池上ふさ恵 中原たみえ 古沢せん 大口きく 鈴木かい 市岡音次郎 小松兼夫 竹村利英 宮崎学 下平忠男 下村修 伊藤修 松沢源逸 水上宗雄 佐野千恵子 倉田一光 西村彦久 影山豊二 小松原和子 尾形きくみ 松原市江 久保田忠男 木下ひで子 福沢武子 松崎正平 林崎男 北村敦喜 松崎正秋 小河克栄 中城金光 井手つや子 水上和子 宮沢多美子 北平夏子 坂山準治 宮脇健介 平賀正治 井手みや子 堀沢里江 小松恵 中山泉 下島孝夫 小原茂幸 小松原泰幸 宮沢国文

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査概要

養命酒遺跡は広範囲にわたり、しかも森林地帯ということで、分布調査も思うにまかせず、調査は困難を極めた。

遺跡を便宜上、上の段（第I～IV区）と下の段（第V、VI区）とに分けて調査を行った。区の区別は現況の道などによるものである。

I～IV区は $20 \times 20\text{ m}$ 四方を大区分とし、その中を更に1～25の $4 \times 4\text{ m}$ グリットに小区分した。グリットの呼び方はたとえば0-A-1グリット、0-C-1グリットである。

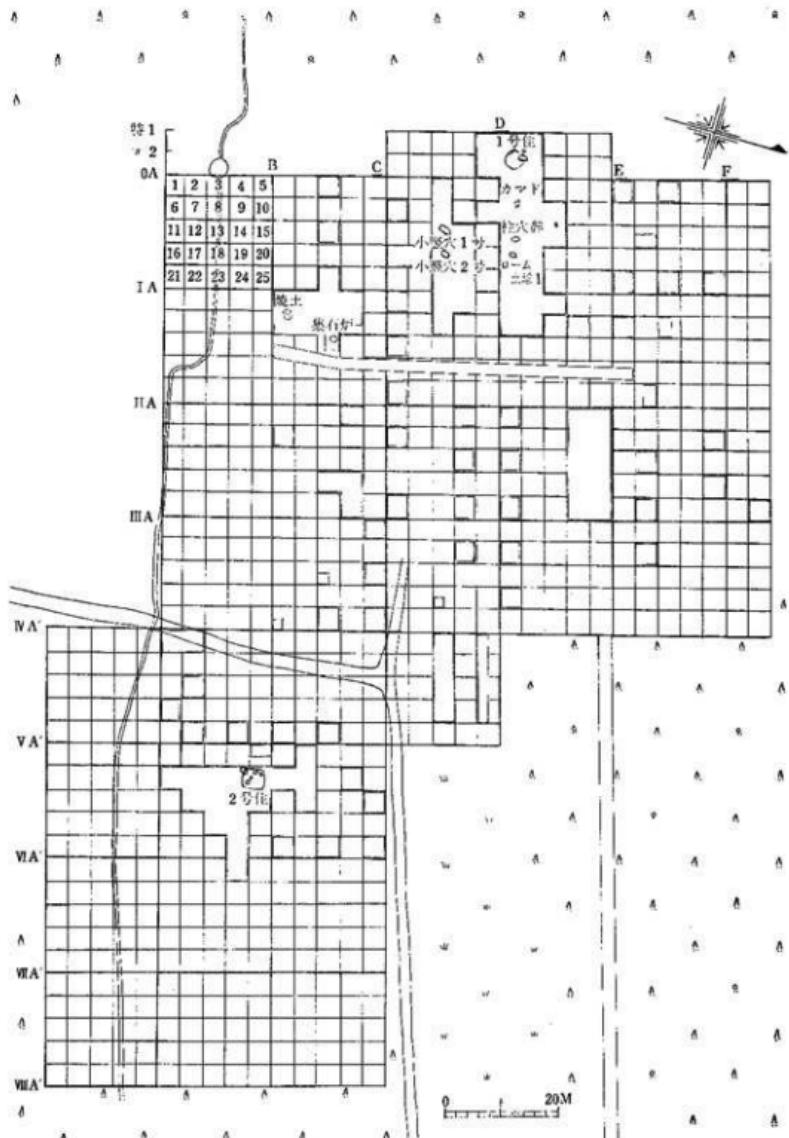
グリットを適宜掘り、遺構確認によって周囲を拡張する方法を採用した。

I区からは平安時代の住居址1基が確認されただけである。

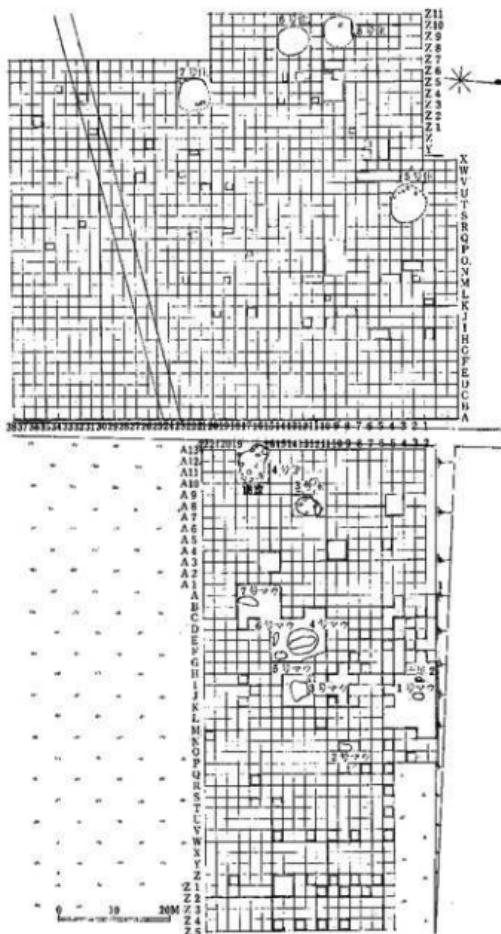
II区は遺物が豊富に出土し、遺構も焼石炉、炉址状遺構、小窓穴2基、平安時代の住居址1基、カマド址、柱穴群、土壙が検出されている。

I-B, C, D区から縄文時代早・前期に属する土器、石器が多量に発見されている。

森林であったことや、後からの遺構構築によって非常に搅乱されており、層位的にとらえることは



第6図 第I~IV区造構図 (S=1/1000)



第7図 第V・VI区遺構図 ($S=1/1000$)

できなかった。

第III区からは縄文時代中期の土器片がわずかに検出されただけである。

第IV区はほとんど工場建設予定地外のため、部分的な調査で縄文時代中期の土器片を採集している。

第V、VI区は各々別のグリットを組んで調査を行った。グリットは 2×2 m である。

第V区からは縄文時代中期の住居址2基と弥生時代の特殊マウンド遺構7基、更に土壙を検出した。また北端中央部より押型文土器が出土している。

第VI区からは縄文時代中期の住居址が4基確認された。（吉村達）



第8図 炉址状遺構実測図 (S=1/80)

第2節 遺構及び遺物

1 繩文時代

1) 早 期

遺 構

イ) 売址状遺構 (第8図、図版13)

I-B-1, 6グリットに厚さ5cmほどの焼土が1mほどの広さにわたって発見された。焼土の西側には焼石がみられる。

焼土の付近は流石がみられず、ローム面はテラス状に平坦をなしている。流石のみられないのは、意識的に取り除いたことも考えられる。

焼土の北側10m位の範囲内にわたって押型文土器が出土している。(福沢正陽)

ロ) 焼石炉 (第9図、図版31)

32)

I-B-14グリットに位置している。

礫混じりのローム層を掘り込んで、内部に自然石を逆三角錐に積んだものである。

大きさは、 $1 \times 0.9\text{m}$ 、深さ40cmですり鉢状を呈す。

四方の壁は大きな自然石を利用しており、赤く焼かれている。

内部の堆積状態は底部に薄くローム土混じりの焼土が堆積し、その上に焼土をわずかに炭化物を多量に含んだ混合土がみられ、赤く焼けただれた焼石が含まれている。焼石は上面にくるほど密度を濃くしている。

内部より出た石は110個ほどで、頭大からこぶし大の大きさのものである。石の種類は花崗岩がほとんどで、わずかに砂岩などがみられる。

上部より押型文土器(第11図-1, 6, 8)が出土している。(福沢正陽)

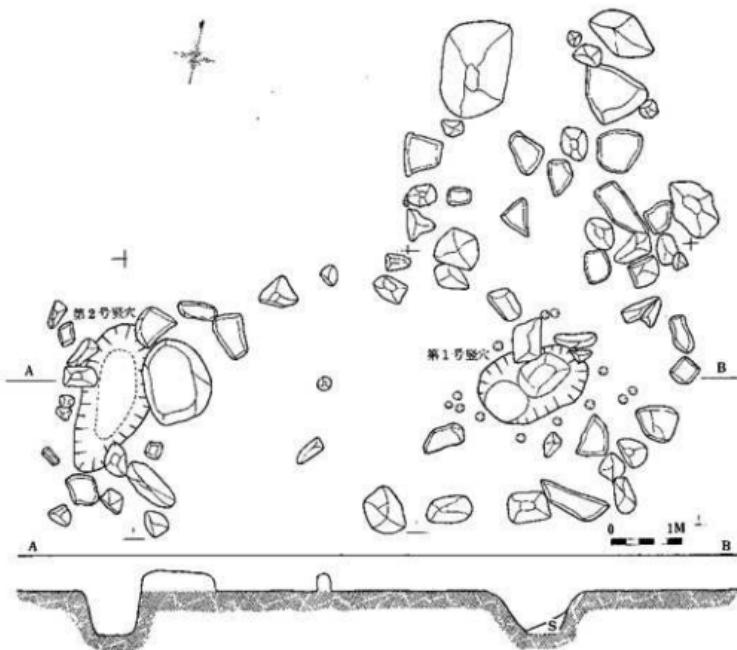


第9図 焼石炉実測図 (S=1/20)

ハ) 小堅穴址 (第10図 図版10, 14)

0-C-13と18グリットに小堅穴址が、2基発見された。

第1号は橭円形を呈し、長径1.5m、短径1mである。壁高は東で20cm、西は60cmを測り、東側は自然石が露出している。



第10図 第1・2号小堅穴実測図 (S=1/80)

堅穴の周囲には直径10cm前後的小ピットが13個点在している。内周の6個は規則性を持ち、外周のピットは北に2個、東側に2個、東側に3個組をなしてみられる。

覆土中よりは炭化物がわずかに検出されたが、遺物の出土はない。

第2号は第1号の西約6mにあり、砂質ローム層を掘り込み、南北2m、東西1mの長橭円形のプランを呈する。

壁高は60cm前後を測り、西は直に近いが、南北は緩傾斜を示す。

底部はほぼ平坦であるが、特別タタキを加えてはない。

堅穴の周囲は流石が転落し、落石群の間を掘りくぼめたものである。

遺物は全く出土せず、わずかに炭化物が検出されたにすぎない。

両堅穴址とも内部よりの遺物の発見はなかったが、付近よりは早期の土器片がかなり発見されてお

り、断定できないが、それらの土器を持つ人々の構築によるものと思われる。(小池政美)

遺物(第11~14図、図版44~47)

縄文時代早期に属する土器が200点ほど発見されている。出土散在状態は0-C,D区及びI-B区より集中して発見されている。更に第V区の第1号マウンドの西側からも10片ほど出土している。

明らかに造形に伴うものは、第11図1,6,8の3片で焼石炉からの出土である。先に述べたように層位はつかむことはできず、縄文時代前期の遺物とともに同一層から出土している。

石器も明らかに早期に属するもの、前期に属するものという判別が難しく、次項の前期の所に一括して報告することとした。

早期に属する土器を押型土器(第I群)と胎土中に纖維を含むもの(第II群)とに分けて説明する。

第I群 土器

本群は押型土器を一括したもので、文様の面から山形文(a類)、格子目文(b類)、横円文(c類)に分類した。

量的には山形文(a類)が多く、格子目文(c類)は少ない。

a類 山形押型文(第11,12図-1~28、図版44,45)

色調は全般的に黒褐色ないし、黄褐色を呈するものが多い。厚さは4~7mmを測るものが普遍である。

1,5,7,14,16,18は口縁部破片で、14は内反するが他はすべて外反するものである。口肩部に1は刻目、5,16,18は山形文が施される。

1~3は山形文を縦位と横位に配したいわゆる帶状施文をなすものである。2の内面には擦痕がみられる。胎土中には雲母、長石を含み、焼成は良好である。

4~12は無文帯を持つものである。4~9は無文帯をはさんで山形文を横位に、10~12は縦位に施すものである。長石を含み、全般的にザラザラした感じをうける。

13~18は横位に施されるもので、13,14は山形の幅が小さく、波長も割合長い。15~17は鈍角な山形文を持つもので、陽刻面と陰刻面が1対1の割合を示す。18は内面に擦痕がみられる。

19~25は縦位山形文である。施文原体の細いもの(20,21,23)、太目のもの(19,24,25)、不規則なもの(22)とがある。

26~28は縦位山形文と鋸歯状押型文を組み合わせたものである。焼成は良好である。胎土にわずかに長石を含む。

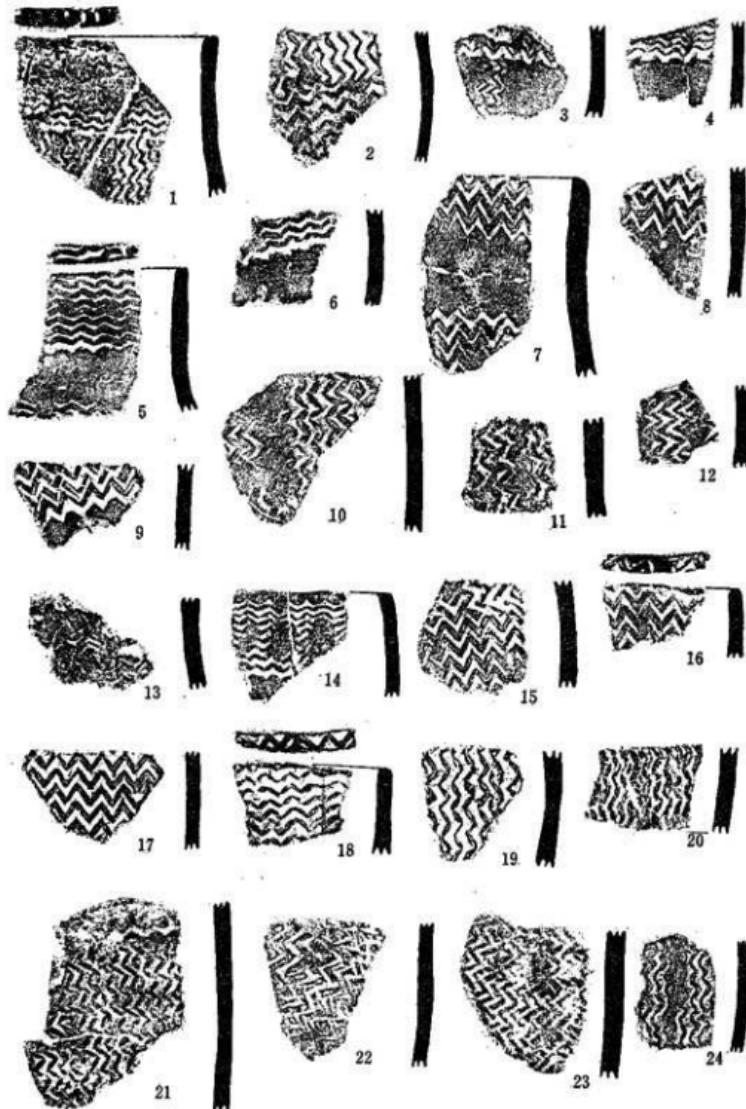
b類 格子目押型文(第12図-29~35、図版45)

色調は黒褐色、黄褐色、茶褐色を呈す。厚さは5,6mmである。29,30は外反する半縁口縁の破片で、口肩に格子目文が施される。文様自体は全般に菱形や平行四辺形のものが多い。

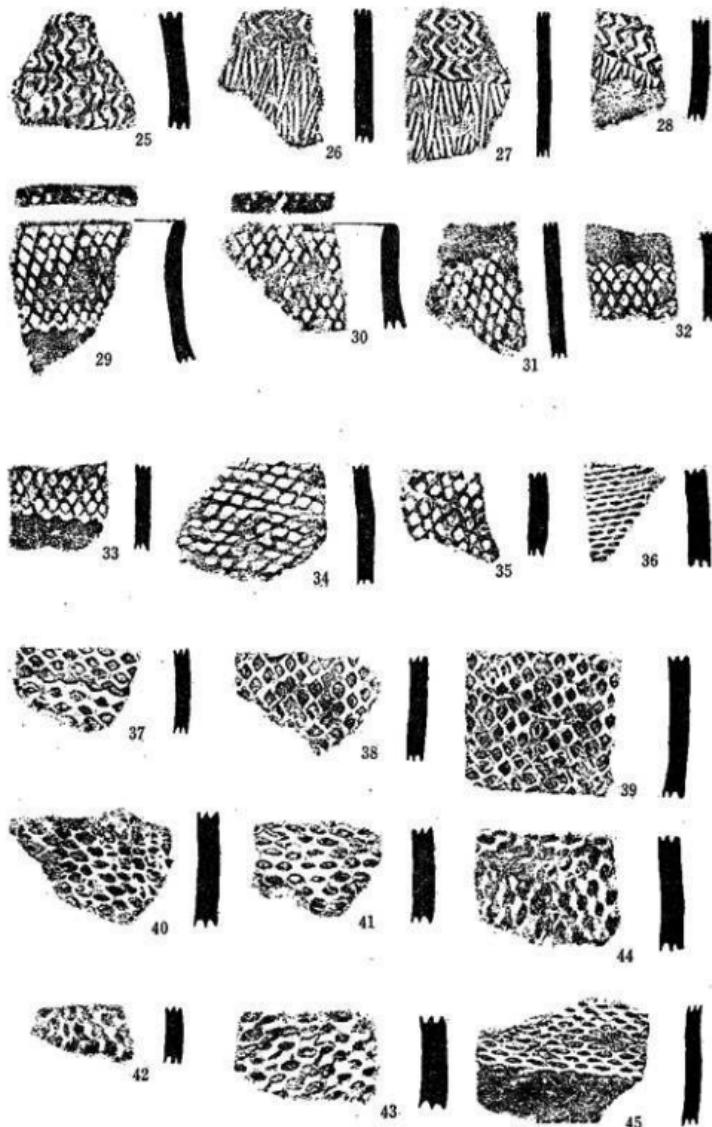
29~33は無文帯を持ち、焼成は良好である。

c類 横円押型文(第12図-36~45、図版45)

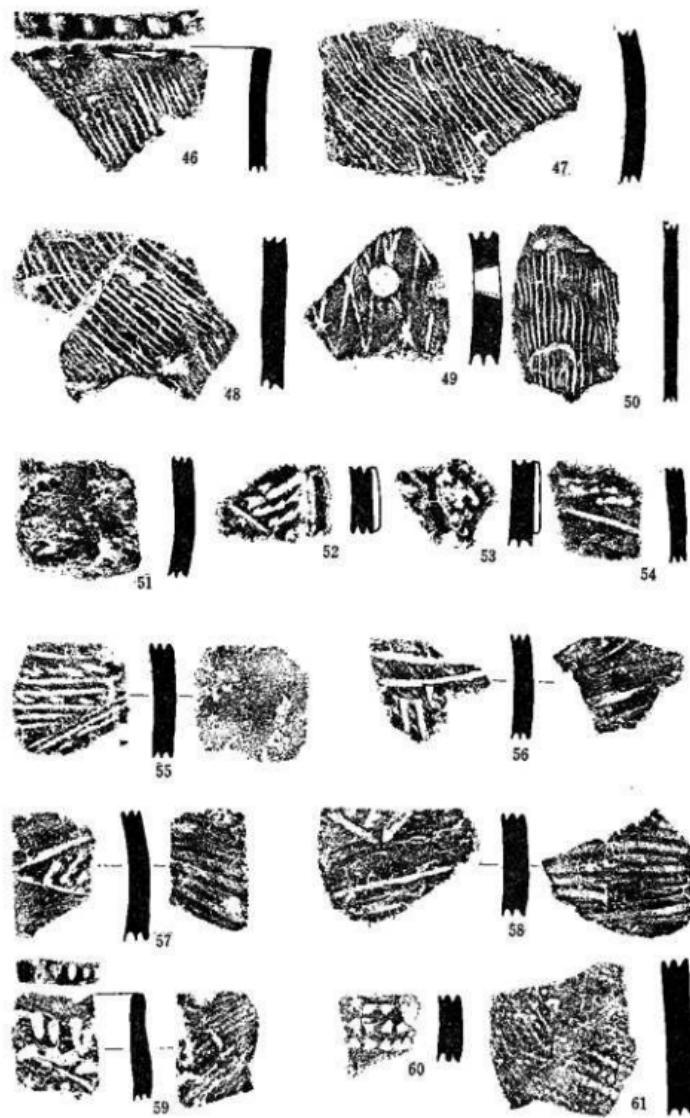
色調は赤褐色、黄褐色、黒褐色を呈す。厚さは5~10mmで他のものより若干厚目である。



第 11 図 出土土器拓影図（織文時代早期第 I 期）(1/2)



第 12 圖 出土土器拓影圖（縄文時代早期第 I 群）(1/2)



第13図 出土土器拓影図（縄文時代早期第Ⅱ群）(1/2)

36は米粒大程の小さな楕円が連鎖状に施されるもので、器付を多量に含み焼成は良好である。

37~39はソロバン玉状に角ばった楕円を示す。楕円自体の大きさは一定でない。

40~44は胎土中に多量の繊維を含み、楕円は粗大である。焼成はあまり良くない。

第Ⅱ 磁土器

本群は胎土中に繊維を含む一群で、文様から7類に分けて説明することにする。

a類（第13図-46~50、図版46）

撚糸文土器を一括してa類とした。色調は黒褐色（46, 48）、黄褐色（47, 49, 50）を呈す。厚さは5~10mmである。

46はわずかに外反する平縁口縁の破片で、口唇部に指頭による浅い押圧痕がみられる。

49は撚糸文を全面に網状に施すもので、いわゆる補修孔がみられる。

50は薄手に固く焼かれ、器内面に擦痕が横走している。

b類（第13図-51、図版46）

表面に格状压痕文を施すものである。器内面には擦痕が横走している。色調は黒褐色、雲母を含んで焼きは普通である。

関東地方の子母口式に比定でき得るであろう。

c類（第13図-52~60、図版46）

細隆起線、沈線、刺突文などによって幾何学的な文様が構成されるものである。

色調は様々で黄褐色（52, 54, 59）、黒褐色（53, 55, 56）、茶褐色（57, 58, 60）をなすものがある。

胎土中には多量に長石を含み、器厚は6~9mmで全般に中厚手である。

59は外反する平縁口縁の破片で、口唇部にはヘラ状工具による浅い刻み目が施される。

文様の構成から次のように分類できる。

細隆起線によって区画された内部に、不規則な刺突文の施されるもの（52, 53）、細沈線によって区画された内部に沈線を施すもの（54, 55）、太目の沈線と刺突文が組み合わさせて文様が表出されるもの（56~58）、刺突文だけで文様が描かれるもの（59, 60）である。

11~14は器内面に只股条痕文が横位ないし斜位に施されるものである。

鶴ヶ島台式に比定でき得る。

d類（第13, 14図-61, 62、図版46, 47）

外面は斜繩文、内面には横走する擦痕のみられるものである。

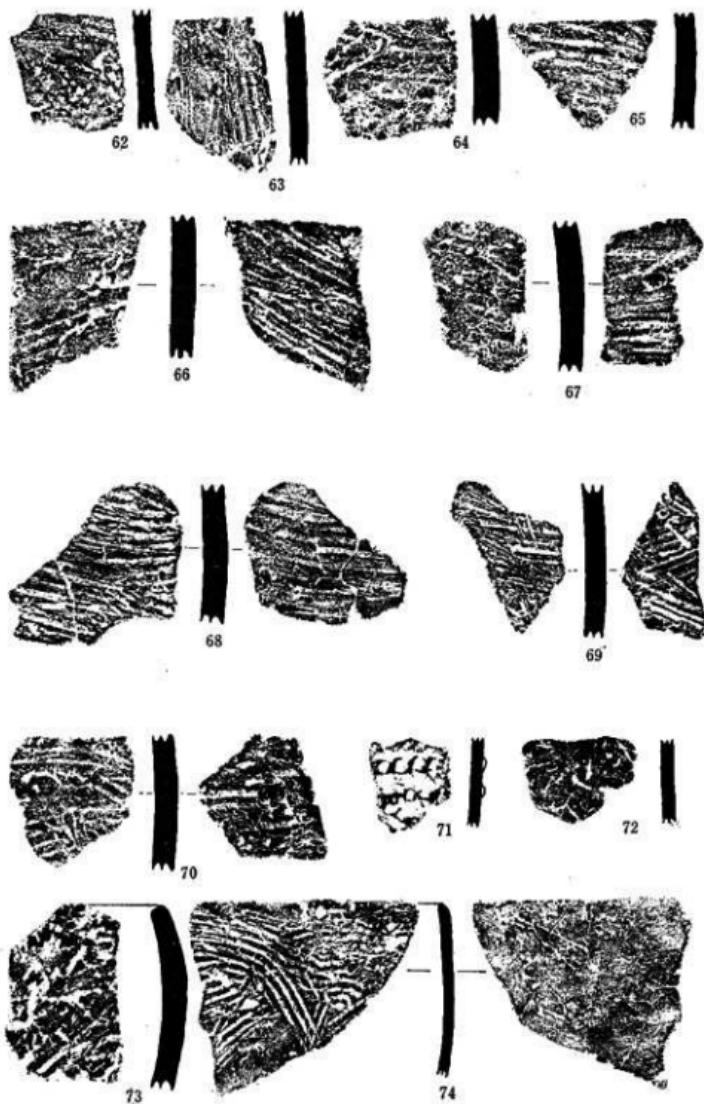
16は茶褐色、17は黒褐色を呈し、共に固く焼かれ。胎土中には長石が少量含まれる。

茅山下唇式に比定できる。

e類（第14図-63~70、図版47）

アナグラ属の只股条痕文が施されるもので、横走、斜走するものが普通である。器内面にも条痕がみられる。

色調は黄褐色を呈すもの（63, 96~70）と赤褐色（64, 65）を呈すものとがある。



第14圖 出土土器拓影図（繩文時代早期第Ⅱ群）(1/2)

器厚は6~10mmの中厚手のものが多いが、中に厚手のものもみられる。焼成は全体に良好である。

茅山上唇式に比定できる。

f類（第14図—71~74、図版47）

色調は赤褐色をなすもの（71）、黄褐色を呈するもの（72~74）とがある。

器厚は4~8mmを測る。

73、74は内湾する口縁部の破片で、口唇は丸味を持つ。

71は粘土紐による低い隆背を横走させ、その上に押圧文を施したものである。

72~74は織維を多量に含む点で、今までの織維土器とは異質である。

72、74は薄手で焼成は極めて良好である。

73は外面にわずかに貝殻条痕文が施されるもので、内面に擦痕を有し、織維束が露出している。

74は貝殻条痕文を斜状に施し、更にその上に弧状に走らせたものである。（小池政光）

2) 前期

0-C、D区を中心として、縄文時代前期の遺物が出土したが、遺構は検出できなかった。

遺物についてのみ記載する。

遺物

土器（第15、16図、図版48、49）

縄年上からa~j類に分類して説明したい。

a類（第15図—1~4、図版48）

薄手細線文指痕土器あるいは「おせんべい土器」と呼ばれる一群のものである。

色調は白色をなすものが一般的で、厚さは4mm前後を測る。

1~3はヘラ状工具による刺突文が左下がりに施され、2は口縁部に沿って櫛齒状施文具による刺突がみられる。

b類（第15図—5、6、図版48）

複合口縁を持ち、単節糸縄文が施されるもの。

色調は赤褐色を呈し、固く焼かれている。胎土中に織維を含んでいる。

縄文前期初頭に位置づけられるであろう。

c類（第15図—7~10、図版48）

数条の粗大な爪形文を口縁に沿って施すものである。

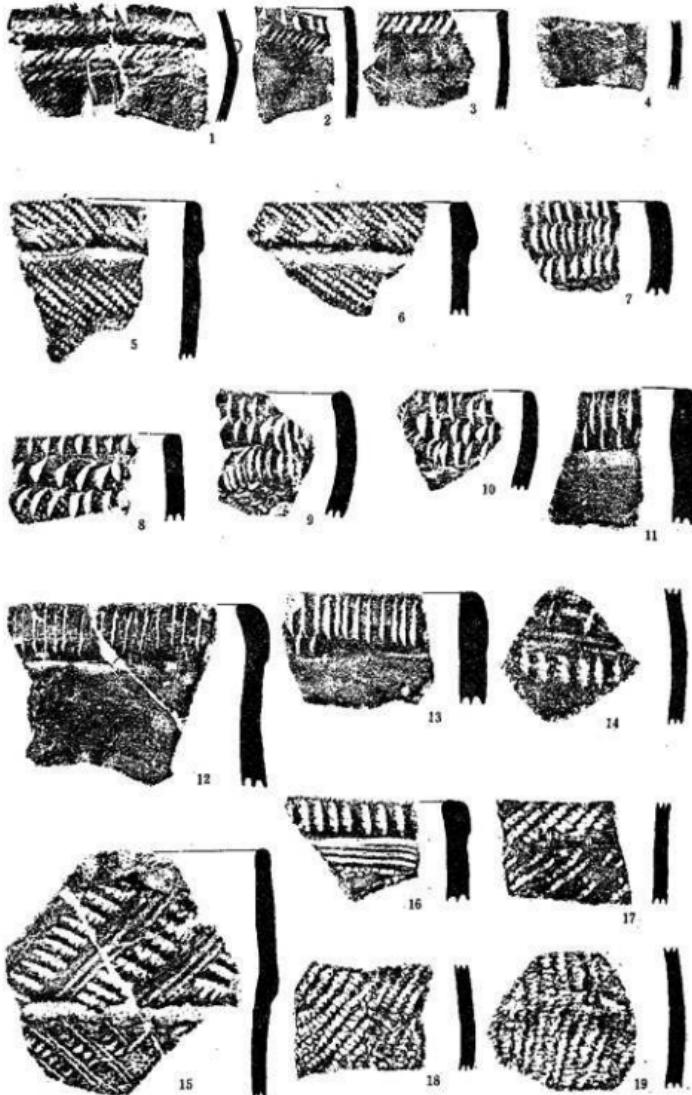
色調は黄褐色（7）、黒褐色（8~10）を呈し、厚さは7mm前後の中厚手のものが多い。

口縁部は内湾ぎみで口唇は丸味を持つ。

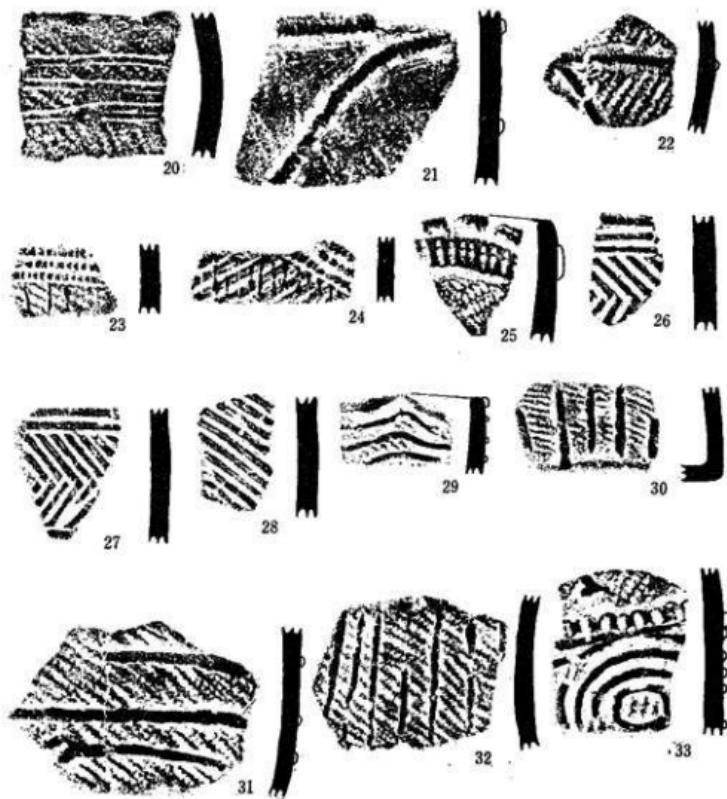
9には爪形文の下に単節糸縄文がみられる。

d類（第15図—11~13、図版48）

複合口縁を持ち、細長い爪形文を施したものである。



第15図 出土土器拓影図（縄文時代前期）(1/2)



第 16 図 出土土器拓影図（縄文時代前期）(1/2)

色調は黄褐色をなし、焼成は普通である。器厚は厚手の方である。胎土中には多量の雲母を含むが、c類同様纖維は含まない。

c, d類はあまり類例を求めて得られない土器であるが、上伊那郡宮田村中越遺跡より出土が知られている。

e類（第15図—14～16、図版48）

櫛齒状器具による施文のみられるものである。

色調は赤褐色をなし、焼成は良好である。

15には異条斜纏文がみられる。

神ノ木式に類似する。

f類（第15図—17～19、図版48）

胎土に纖維を含み、斜纏文の施されるもの。

色調は茶褐色（17, 19）、黒褐色（18）を呈し、焼成は普通である。

17, 18は単節の斜線文、19は複節の斜纏文である。

黒浜式に比定でき得る。

g類（第16図—20、図版49）

斜纏文を地文にし、半截竹管による沈線を加えたものである。

黄褐色を呈し、雲母を多く含む。纖維の混入はみられない。焼成は普通である。

諸磯B式に比定できる。

h類（第16図—21～25、図版49）

関東の十三菩提式に比定でき得るものと一括した。

色調は茶褐色（21～22）、黄褐色（23～25）を呈し、厚さは5～8mmの中厚手で、固く焼かれている。

21, 22は縦文地に連続爪形文を持つ粘土紐を施したもの。

23, 24はヘラ切り陸線文に連続爪形文を施したもので、23は縦文地、24は沈線の上に細い粘土紐を加飾している。

25は波状口縁で、頂部には3個の小突起がみられる。口縁に沿って幅広い粘土紐を粘付し、棒状工具による刺突が施される。下部は縦文がみられる。

i類（第16図—26～28、図版49）

半截竹管によるシャープな平行沈線がみられるもの。

色調は赤褐色（26）、黄褐色（27, 28）で焼成は良好である。

下島直後式に位置づけられる。

j類（第16図—29～33、図版49）

これら前期末葉の土器に混じって関西地方の影響を受けたことを物語るかのように、関西系の土器が出土している。

地文は縦文で、その上に粘土紐を使って様々な文様を表出するもので波状（29）、縱位（30, 32）、

横位（31）、同心円状（33）などがみられる。

29は波状の口縁部、30は平底底部である。

色調は黄褐色（29、31～33）、赤褐色（30）を呈し、焼成は良好である。

関西地方の大歳山式に類似する。（小池政美）

石器（第17～21図）

今回の発掘による石器は100点を超えるが、遺構との明確な共存関係を持つものは縄文時代中期の住居址から出土したものだけである。他は縄文時代早・前期の土器に伴って出土したもので、その層位関係はすでに述べたように不明のため、ここでは一括して報告することとする。

以下形態別に5種類に分けて説明をする。

a 石鎌（第17図）

1～10は抉り込みを持つ二等辺三角形のものである。全体に厚目で断面はレンズ状を呈し、稜がはっきりしないのが特徴である。調整は両面とも丹念に行われ、第1次剝離痕はみられない。11～13は五角形のものに属するかも知れない。調整は前種同様丹念である。断面はレンズ状を示すが薄手である。

14は脇部に明らかに張りを持ち、五角形を呈す。この形態を持つものは早期に良くみられるものである。薄くレンズ状の断面を示し、調整は丹念である。

15～19は断面が三角形を呈するので、抉り込みはあまりはっきりしないものである。一面は両端から打ち欠いて、後を持たせているが、裏面は第1次剝離を残して、縁に沿って若干のエッジを付している。15、16、18は調整が丹念でない。加工途中のものか、機能上の違いかは不明である。19は調整途中のものと思われる、断面は台形を呈している。

20は有舌の石鎌で片刃に鋸齒状の刃部を有す。中央に自然面を残すが、縁に沿っては細かい剝離がみとめられる。断面は薄い三角形を示す。

21は剝片縁である。表面は側辺から大きく打ち欠いて稜を作出し、若干のエッジを付している。裏面は第1次剝離面に頭部を中心にエッジを付するものである。

22、23は大形の石鎌である。

22は剝片を磨きあげて細かなエッジを付したもので若干抉り込みがみられる。

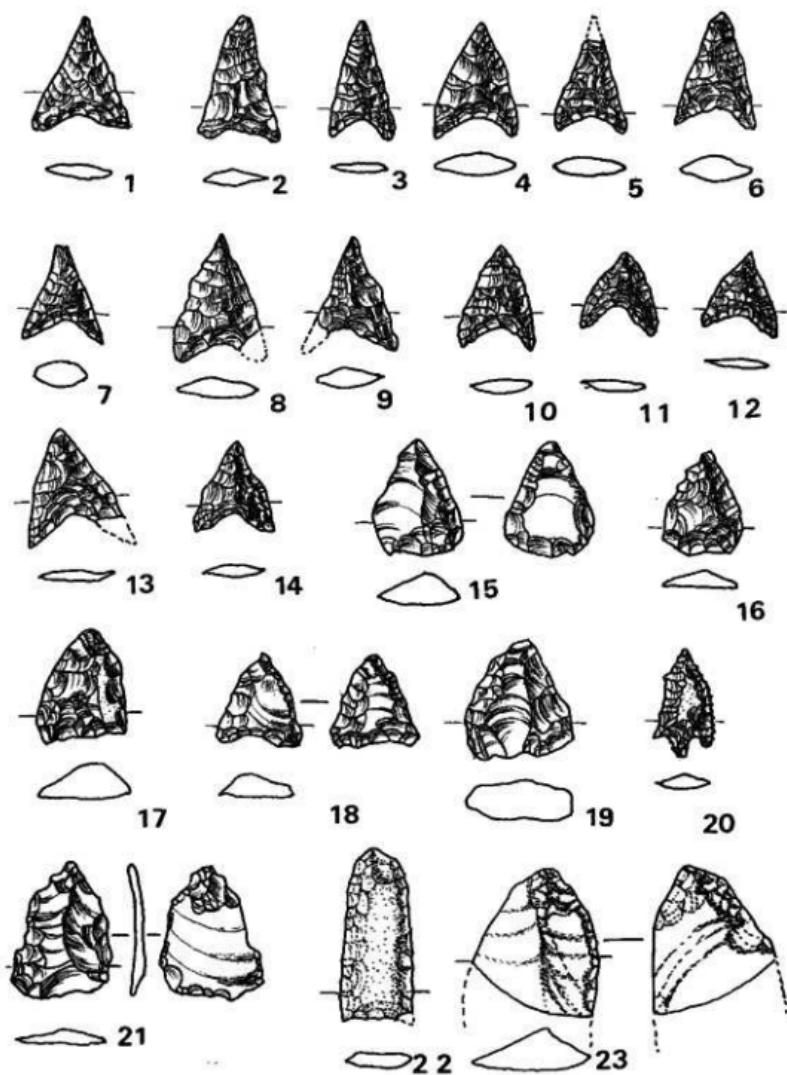
23は21と同様の製作手法を持つ。片側のみに調整を加えた点、15、16、21と共に注目したい。

石材は黒耀石（1、4、5、7～13、15～21）、チャート（2、6、14）、頁岩（22、23）である。

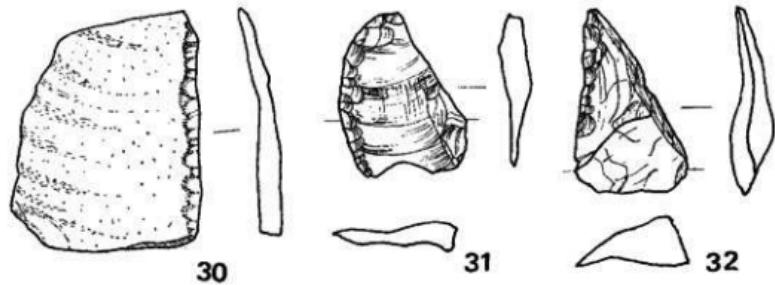
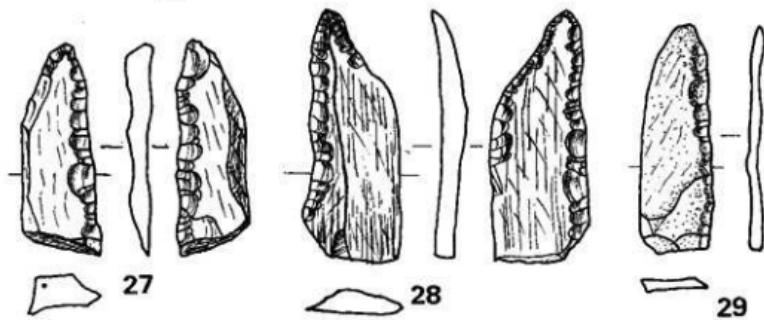
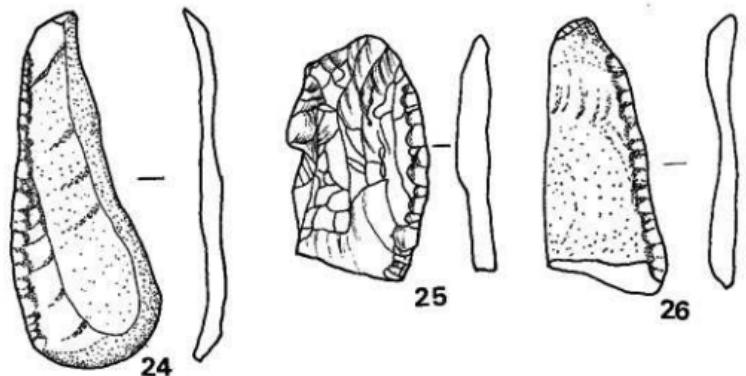
b 摶器・削器（第18～20図—24～56）

ここに掲げる、削器として分類したものは、形態も様々で、機能的にも二種類のものが組み合わさったもの、機能がはっきりしないものなども含まれる。

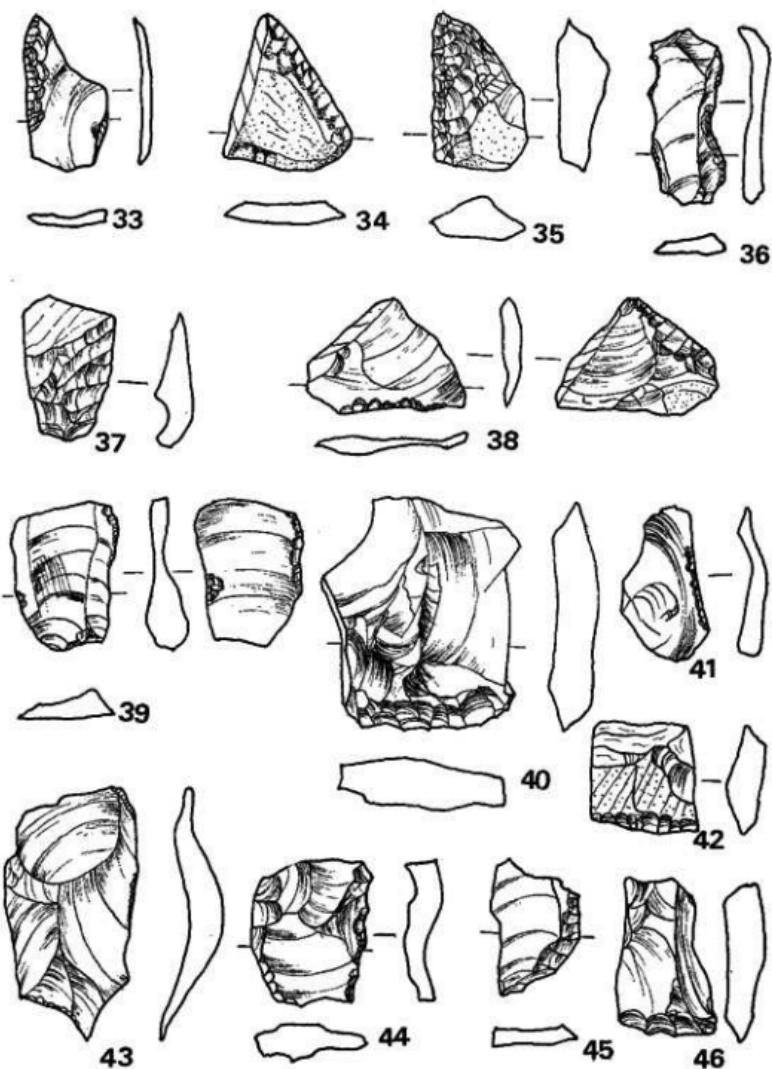
24～34は定形的なスクレーバーである。ナイフ形石器と言っても良いだろう。偏平な剝片の一端に刃部を形成する。片刃のものが普通であるが、27、28は両刃である。27、28、32は彫器的機能を持つ。



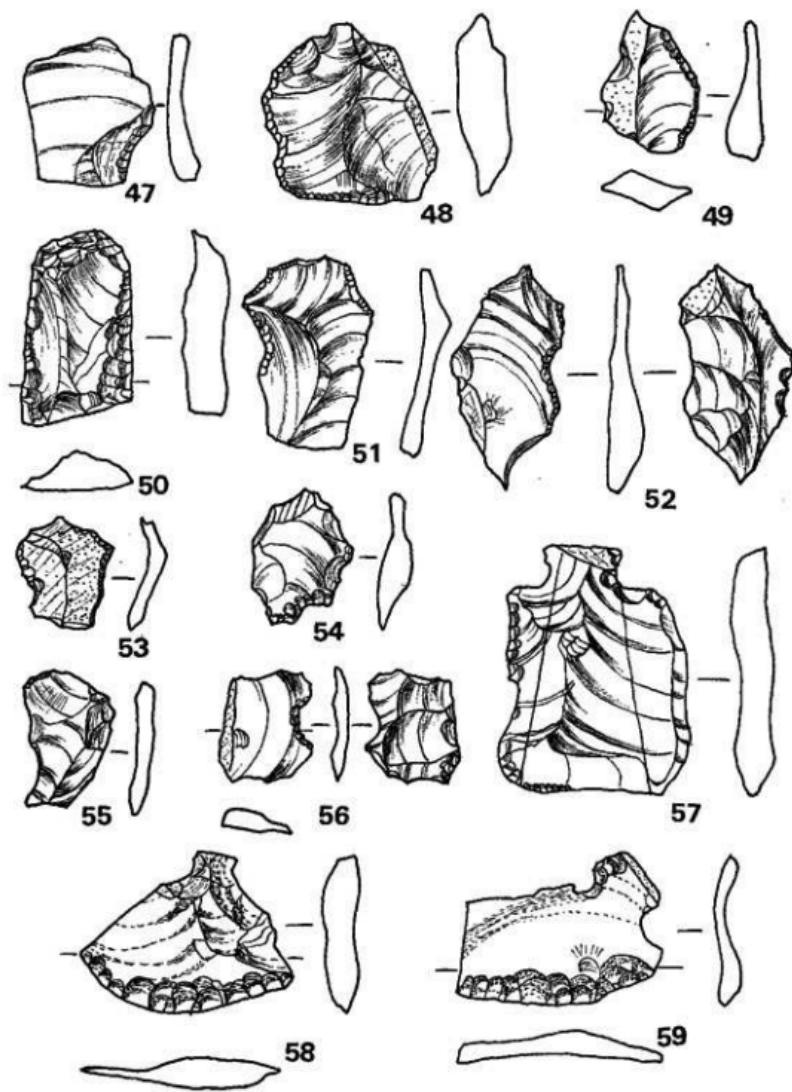
第 17 図 出土石器尖端圖 (1/2)



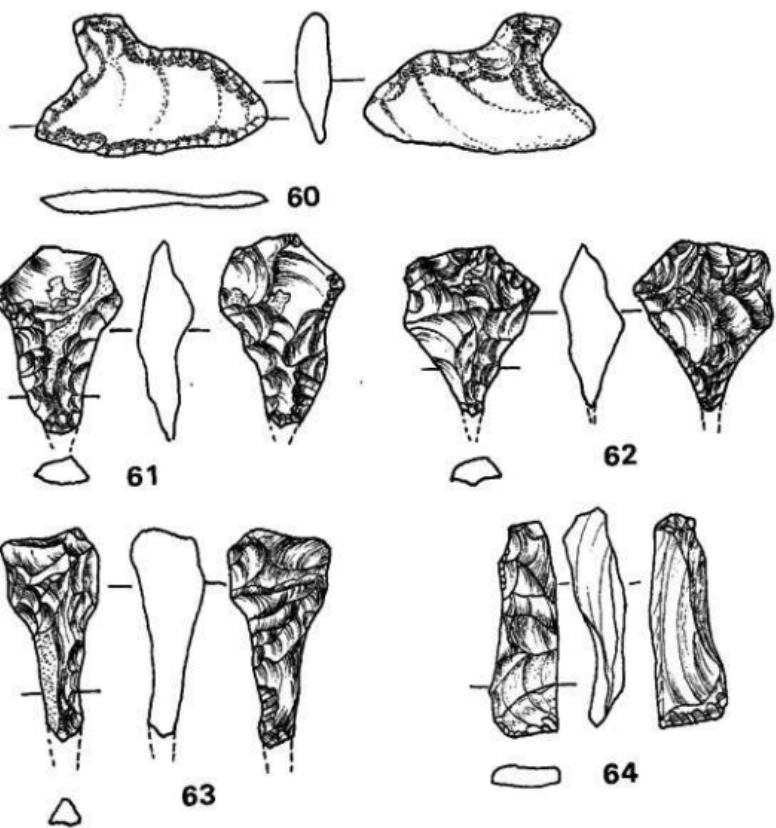
第 18 図 出土石器尖端圖 (1/1)



第19圖 出土石器実測図(1/1)



第20圖 出土石器実測図 (1/1)



第21圖 出土石器実測図 (1/1)

35~49は不定形のものを一括した。35, 37は自然面に數度の細かな剝離を行い片刃片刃を作出している。42はやはり自然面に直接刃部を作出するが、縁にそったエッジを加えて刃部を作出する。41, 45, 47, 49は剥片を利用して刃部を作出したものである。

36, 38, 39, 40, 43, 44, 46, 48は剥片を更に何箇所からも打撃を加えてから刃部を作出したものである。二、三箇所、部分的に刃部を有するのが一般的である。片面加工のみのものが多いが、38, 39は両刃に刃部がみられる。片刃のみで両刃のものはない。

50はヘラ状振器である。分厚く断面は三角形を呈す。縁辺に細かい剝離を丹念に行って刃部を作出している。片面加工である。

51~56はノッチの認められるものである。刃部は前者同様、細かなタッチを繰り返すことで作出す。片面からの加工である。ノッチのある刃部の他にも刃部を持つのが普通で、この二つを兼ねあわせて一つの石器としての機能を持つものと思われる。

石材は黒耀石（28, 31, 33, 35~43, 48, 49, 51~54）、チャート（25, 27, 32, 42, 45~47, 54, 56）、頁岩（26, 30, 34）、安山岩（24, 29）である。

c 石匙（第20, 21図-57~60）

縦形のもの（57）と横形のもの（58~60）とがある。57は黒耀石製でぶ厚く、粗製である。片面加工による刃が部分的に認められるだけで、製作時のものであろうか。

58~60は頁岩製である。58, 59は片面加工で粗製である。

d 石錐（第21図-61~63）

石材は黒耀石製である。調整は粗雑で、断面は61, 62は菱形、63は三角形を呈す。

e 特殊石器（第21図-64）

横長剥片を利用したもので、部分的に刃部がみられ、彫器状機能も認められる。（吉村進）

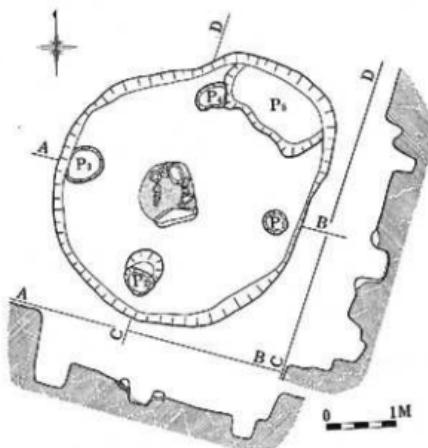
3) 中期

当期の遺構としては住居址6基が確認されている。

イ) 第3号住居址（第22, 23図、図版17, 25）

遺構 本住居址は第V地区の西側に発見されたもので、長軸4.3m、短軸3.7m、北東部が張り出したダルマ形を呈する。

礎混じりのローム層を掘り込んで構築され、壁、床面とも疊が露出して凹凸が激しい。壁高は50cm

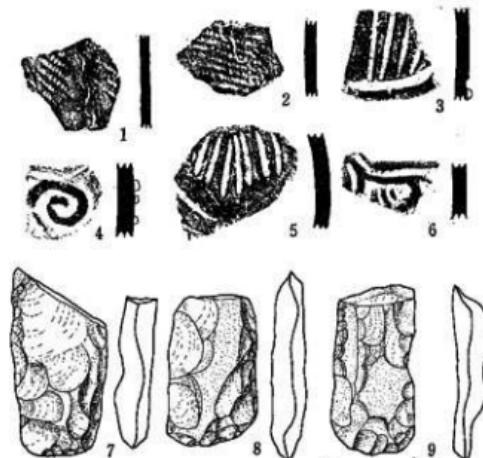


第22図 第3号住居址尖測図 (S=1/80)

前後を測り、直壁に近い。

柱穴は4個で、北東部に稍円形の浅いピットがある。貯蔵穴とも考えられる。

炉は住居址のほぼ中央に位置し、石組み炉である。石組みの周囲には炭化物があり、深く掘り込まれて石組みはその上に構築されている。これからすると炉の造り直しが考えられる。最初の炉は現在の炉よりも大きく、炉の南壁は自然石を使用している。内部より土器片が出土している。柱穴からは炉の造り直しに伴う動きはみられない。



第23図 第3号住居址出土遺物(1/3)

遺物(第23図) 破片のみで器形を知り得るものはない。1、2は縄文を持つものである。3、5は炉より出土した菱形破片。

総じて加曾利E式に比定できる。

石器は打製石斧が3点出土している。共に硬砂岩製である。(吉村 進)

□) 第4号住居址(第24図、図版18、26)

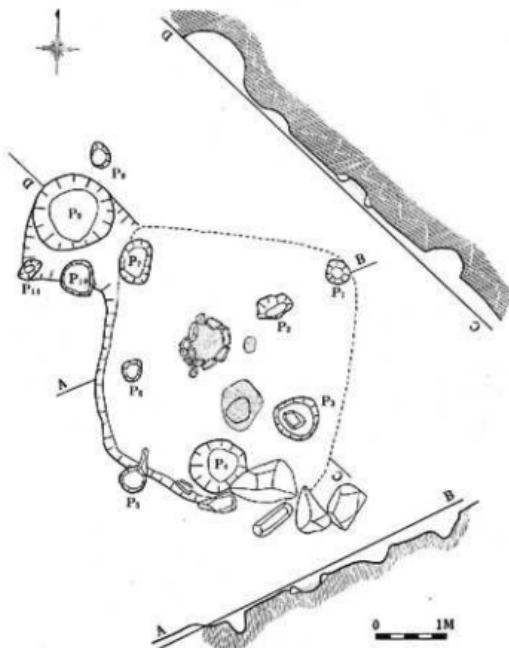
遺構 第3号住居址の南西に発見された住居址で、掘り込みは浅い。西及び南で跡が認められるだけである。

推定規模 3.5m 前後の隅丸方形と思われる。北西部に張り出し部を持ち、径1mほどのピットを伴う。その外側にはピットがみられる。

床面は疊の露出は少なく、平坦であるが、床面は軟弱である。

炉は中央やや西に偏し、円形の石組み炉、掘り込みは深くない。

住居址からはまったく遺物の出土はみられなかった。時期ははっきりしないが、縄文時代中期のものと思われる。(吉村 進)



第24図 第4号住居址実測図 (S=1/80)

第5号住居址（第25、26図、図版19）

遺構 本住居址は南から西にかけて一部壁が認められるのみで、プランははっきりしない。推定規模 $6.6 \times 5.7\text{m}$ の隅丸長方形と思われる。

床面は舟底状で礫が露出している。一部にタタキがみられるが、全体に軟弱である。

ピットは西半部にみられるだけで、東半部からは検出できなかった。

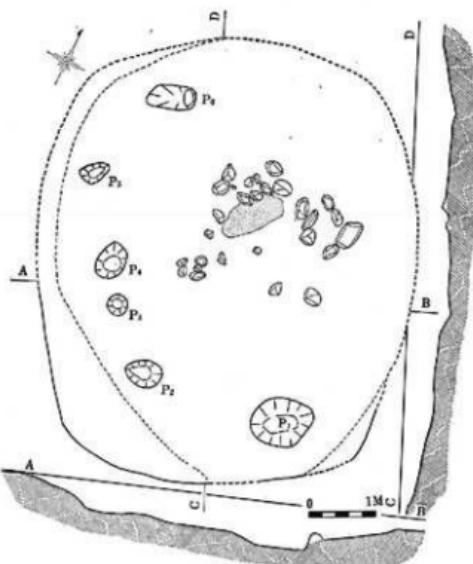
中央部分、自然石の間に焼土が 5cm ほど堆積している。周囲の礫も焼けた痕がみられる。本格的な石囲い戸でなく、自然石の間を利用した戸と考えられる。

遺物（第26図） 多量の上器が出土したが、土器面の磨滅が激しく文様の判明するものは非常に少ない。

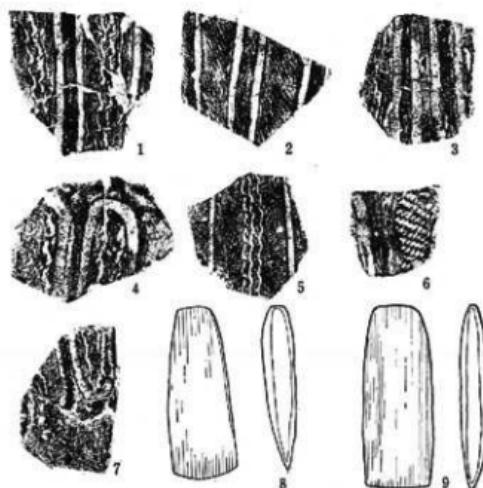
1, 3, 4, 5, 7は同一個体のものである。懸垂する隆帯によって区画し、内部は縄文原体の押捺によるS字状文が施される。

2, 6はやはり区画された内部を縄文で埋めるものである。加曾利E式に比定できる。

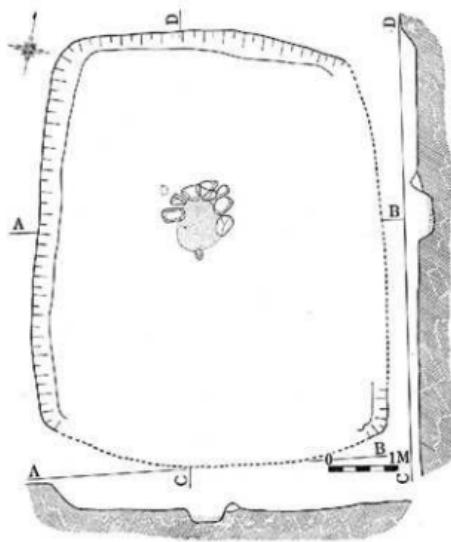
石器は定角の磨製石斧が2点出土している。石材は共に緑泥岩である。（小池政美）



第25図 第5号住居址実測図 (S=1/80)



第26図 第5号住居址出土遺物 (1/3)



第27図 第6号住居址実測図 (S=1/80)

二) 第6号住居址 (第27, 28図, 図版27)

遺構 当住居址は北から西にかけて壁が認められるが、南と東では一部壁があるだけではっきりしない。

推定規模 $6.3 \times 5\text{m}$ の隅丸長方形と思われる。

壁高は西で 30cm , 北では 20cm を測る。

砂質ロームの床は平坦で、炉の周囲は固く踏み固められているが、全体に軟弱である。

炉はほぼ中央にあり、円形の石組み炉である。掘り込みは 30cm ほどである。南側に炉石がないが、抜き取られたと考えたい。

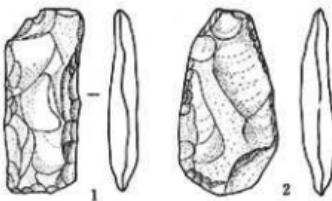
柱穴は精査にかかわらず、まったく検出することができなかった。

遺物 (第28図) 遺物は少なく、土器の細片と打製石斧が2点出土したのみである。

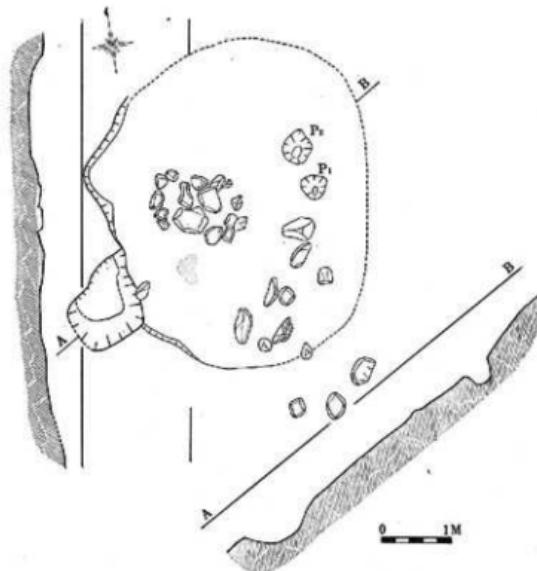
打製石斧は共に硬砂岩製で、調整はあまり丹念でない。(吉沢文夫)

木) 第7号住居址 (第29図, 図版20)

遺構 第6号住居址の南東に位置する。



第28図 第6号住居址出土石器 (1/3)



第29図 第7号住居址実測図 (S=1/80)

西側に壁が明りょうに認められるだけで、プランははっきりしない。

壁高は西で10cmを測る。床面は礫が露出して凹凸が激しい。とりわけ中央部には礫の露出が目だつ。

西南部に50×30cmの範囲で焼土が厚さ5cmほど堆積している。特別な施設は見当たらない。地床炉と考えられる。

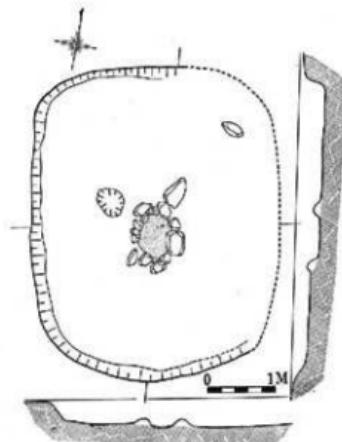
柱穴は東側に2個認められるだけである。

遺物は縄文時代中期加曾利E式の土器片がわずかに出土したのみである。(福沢正陽)

ヘ) 第8号住居址 (第30, 31図, 図版21, 28)

遺構 6号住居址の北に隣接して発見されたものである。

壁高は西で35cmを測るも、東ではなくなっている。床面はやはり礫が露出し凹凸が激しい。



第30図 第8号住居址実測図 (S=1/80)

プランは隅丸長方形で、大きさは 4.6×3.7 m と思われる。

炉址はほぼ中央にあり、椭円形の石組み炉である。掘り込みは 10cm ほどで焼土は厚く堆積する。

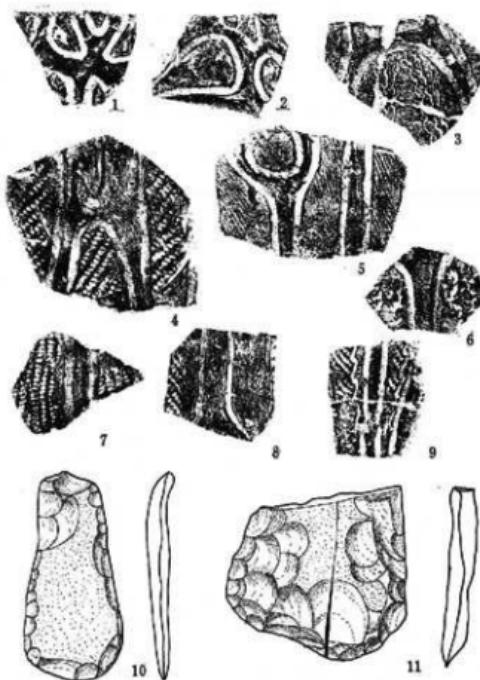
ピットは炉の西に浅いものが 1 個発見されただけである。

遺物（第 31 図） 土器と石器がある。土器は器形を知り得るものはまったくなく、すべて破片である。墻帶によって区画し、内部は施文で埋めるものである。

加曾利 E 式に比定できる。

石器は打製石斧 2 点が出土している。10 は自然面を残すもの、11 は大形のもので欠損品である。

共に硬砂岩製。（吉村 遼）



第 31 図 第 8 号住居址出土遺物 (1/3)

2 弥生時代

当遺跡における弥生時代に属する遺物は、初期に位置する条痕文系土器群のみ、その後に続くものの発見はなかった。

遺物の散布状態は第V地区のみに限られ、それも後述する特殊遺構であるマウンド遺構の付近に限られている。

マウンド遺構は全部で7基確認されている。遺物が確實に伴ったものは第4、5号の2マウンドであるが、構築方法、形態など共通する面があり、更に遺物を伴わない他の遺構も付近より、同期の遺物が出土しているので、同時期のものとして報告する。

遺構といつても溝がまわるもので、内部は周囲の基盤より、わずかであるが高くなるのが普通でそこからマウンド遺構と名付けたものである。(吉村 進)

遺構

イ) 第1号マウンド(第32図、図版33、34)

第V地区北端中央付近より発見された。

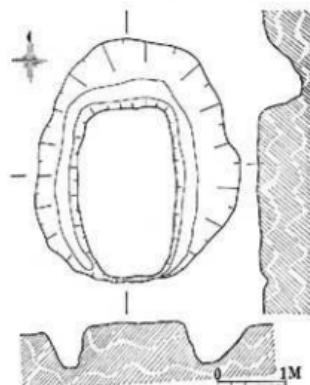
外形は梢円形、マウンド部は方形を呈する。

大きさは外周部が3.5×3m、マウンド部は2.6×1.6mを測る。

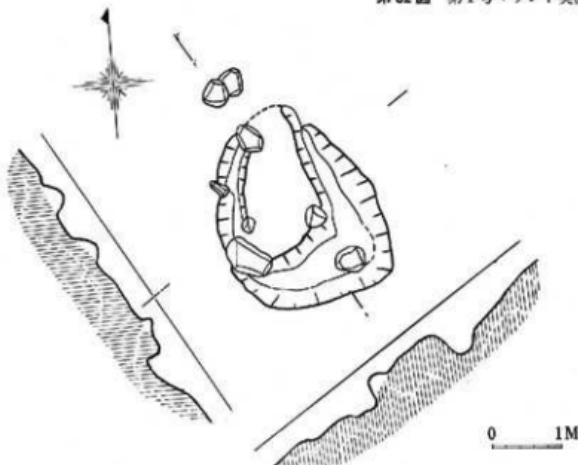
マウンドの外をまわる溝は、上幅60~80cm、底部は20cm前後で、深さは60cmほどである。溝は南に行くに従い浅くなり、南側ではほとんどみられない。

溝の断面は外側はゆるやかで、内側は垂直ぎみである。

溝内には黒色土が自然堆積を示し、底部付近に若干砂質ローム土の流入がみられる。



第32図 第1号マウンド実測図 (S=1/80)



第33図 第2号マウンド実測図 (S=1/80)

遺物は遠縄内よりは出土していない。遠縄の東側黑色土層中より条模文系土器が出土している。

(北沢雄吉)

ロ) 第2号マウンド(第33図、図版35)

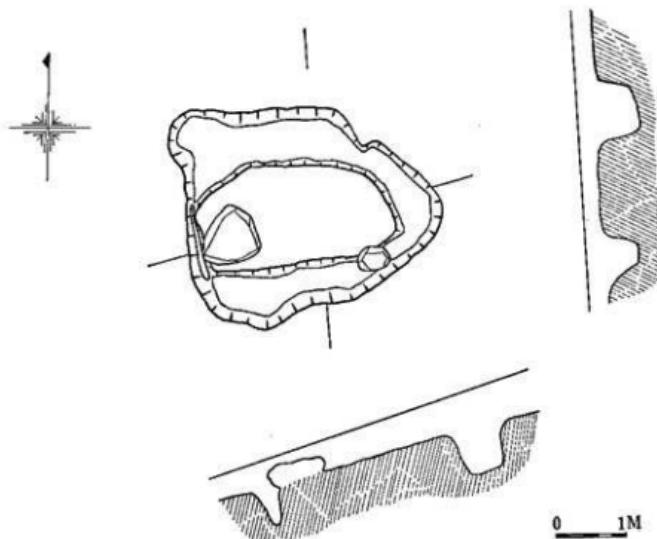
第1号マウンドの北東15mの所に位置する。

溝は北側部にはない。南側は上幅が広いが全体に幅は狭く、深さも30cm前後である。

大きさは南北2.9m、東西2.2mの楕円形で、マウンド部は1.9m×1.2mを測る。

溝の断面は第1号同様、外側はゆるやかである。

遺物は出土していない。(吉沢文夫)



第34図 第3号マウンド実測図(S=1/80)

ハ) 第3号マウンド(第34図、図版36)

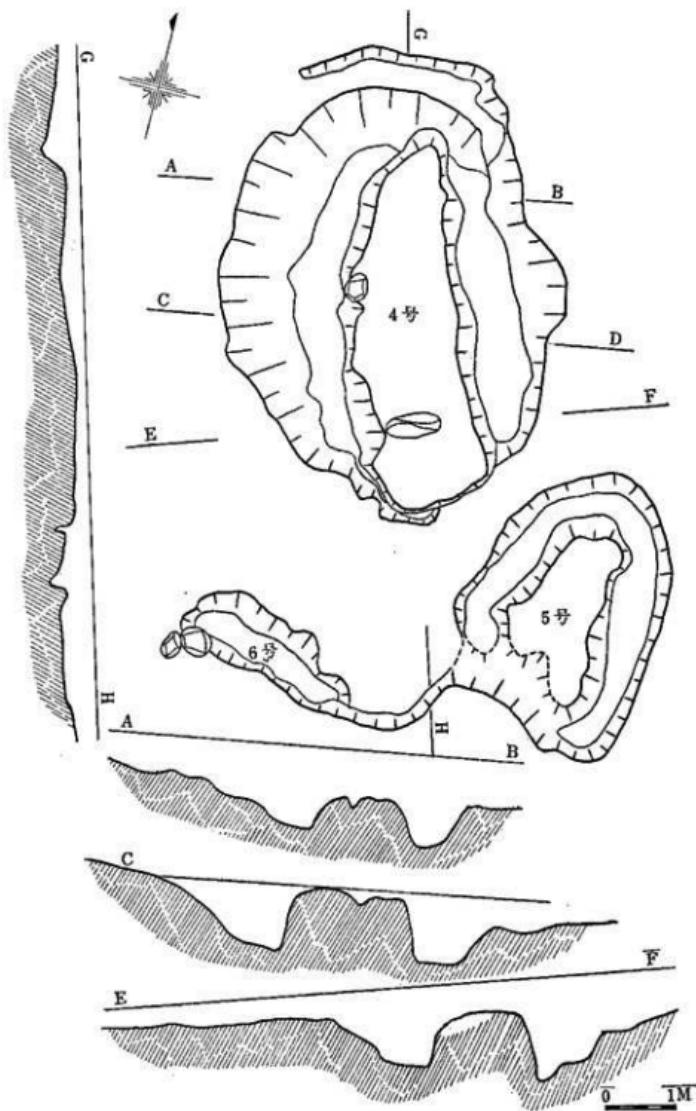
第1号マウンドの南約20mに位置し、西には第4~6号マウンドがある。

プランは変五角形をなし、大きさは東西3.8m、南北3m、東側が頂点となる。

マウンド部は上幅80cm前後の溝によって作られ、ほぼ方形を呈し、2.8×1.5mを測る。西側は幅の狭い別の溝がみられる。

溝の断面はU字状をなして底部はほぼ平坦である。深さ70cm前後である。溝の外壁は内壁よりわずかであるがゆるやかとなる。

実測後マウンド部分を壊して調査を行ってみたが、周囲と同様、固く土層もまったく変化がみられなかった。マウンド部分を一掘り出した土砂で構築したものでなく、溝をめぐらすことによって造



第35図 第4~6号マウンド実測図 ($S=1/80$)

れたものであることが明らかとなった。

遺物は付近から条痕文系土器が出土しているが、遺構内よりは出土しなかった。(小池政美)

ニ) 第4号マウンド(第35図、図版37~39)

第3号マウンドの西にあり、南には第5、6号マウンドが接している。

プランは橢円形を呈し、マウンド部は外形に比べると細く長い。大きさは今回発見されたもの内では最大で南北6m、東西5m、マウンド部は5.2×1.8mほどを測る。

溝は南側を除いてまわるが、上幅、底の状態など一定していない。西側に広く外側の傾斜は非常にゆるやかである。深さはやはり一定しないが80cm前後を測る。

マウンド中央部に幅0.5mのトレンチを入れ調査を行ったが、第3号マウンド同様、後から構築したものではなく、溝をめぐらすことによって造られたものである。

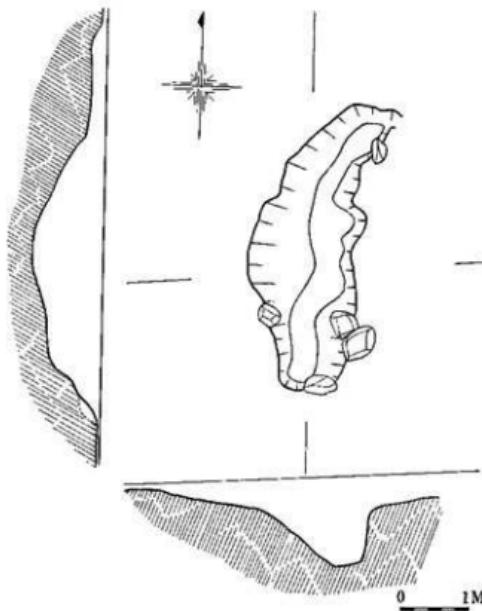
西側溝の覆土中より条痕文系土器がまとまって6点(第37図-1~6)出土した。(古村道)

ホ) 第5号マウンド(第35図、図版40)

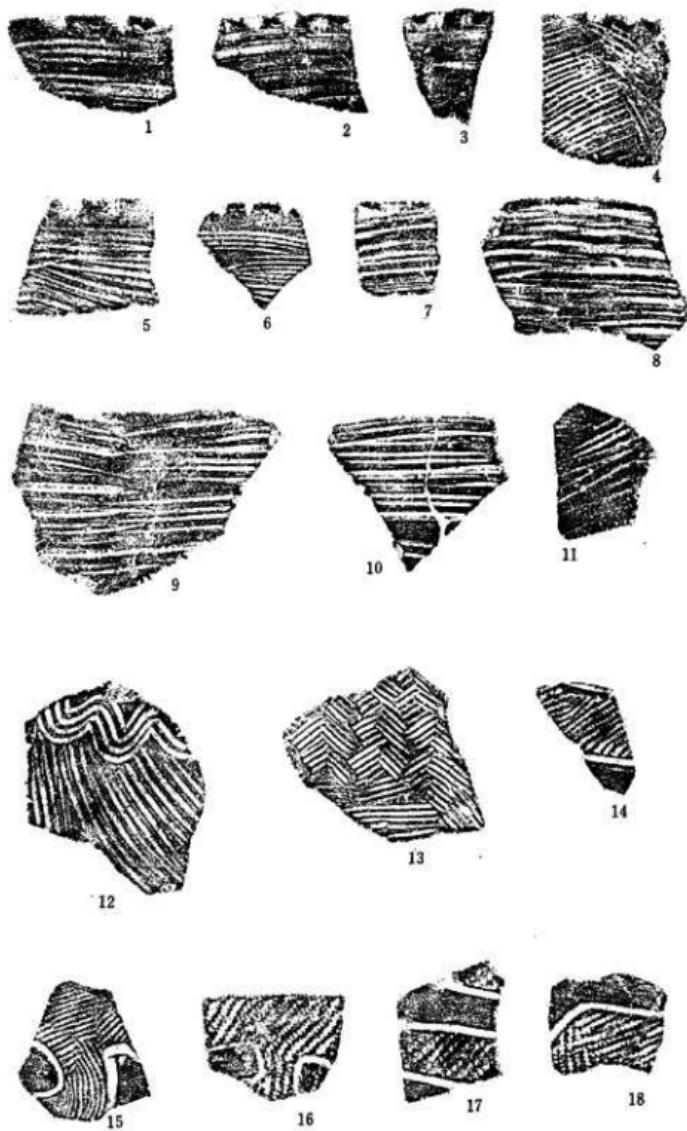
第4号マウンドの北東に接して発見された。

プランは不整ながら橢円形をなし、大きさは4×2.9mである。

上幅80cm、深さ40cmほどの溝が南側を除いてめぐる。マウンドの大きさは2.5×1.4mである。



第36図 第7号マウンド実測図(S=1/80)



第37圖 出土土器拓影圖(弥生時代)(1/2)

溝の断面はやはり外側の傾斜がゆるやかとなる。

遺物は東側溝内より条痕文土器（第37図-7, 8）が出土した。（福沢正陽）

ヘ) 第6号マウンド（第35図、図版41）

第5号マウンドのすぐ西にあり。北側の溝が発見されたものである。

溝の上幅は80cm、底部の幅は50cmで、深さ50cmを測る。

マウンドは南側にあり、南側の溝ははっきりと認められなかった。

遺物は出土していない。（吉沢文夫）

ト) 第7号マウンド（第36図）

第4号マウンドの北西約10mに位置し、溝が発見されたものである。

溝の上幅1~1.5m、底部の幅は30cm前後、深さは80cmである。溝の長さは4mを測るが、溝は切れて東側にはみられない。

マウンド状とはならないが、溝を掘って、ある一定の区域を区切るということには変わりなく、他と同様として良いだろう。（北沢雄喜）

遺 物（第37図、図版50）

遺構より出土したものは少ない。第4号マウンドからは第37図1~6、第5号マウンドからは7、8が出土している。他はマウンド遺構の付近より出土したものである。

すべて破片で器形を知り得るものはないが、菱形土器（1~12）と壺形土器（13~18）が出土している。

胎土には石英粒をかなり含み、4のように露出するものもみられる。器面調整は良く黒褐色ないし、黄褐色に固く焼かれている。文様は竹管工具ないし櫛指きによる条痕を施すものと、縦文と沈線とからなるものとある。

1~11は竹管工具による条痕が横走るものである。これらの文様を持つものは概して菱形土器に多く、肥厚しわざかに外反する口唇部には指圧痕（1~5, 7）や刻み目（6）を持つのが普通である。12は櫛指きによる波状文、弧状のみられるものである。13は竹管工具による絞杉文が施される。14~18はいずれも肩部破片で縦文と沈線とから構成される、いわゆる磨消縦文のみられるものである。（小池政美）

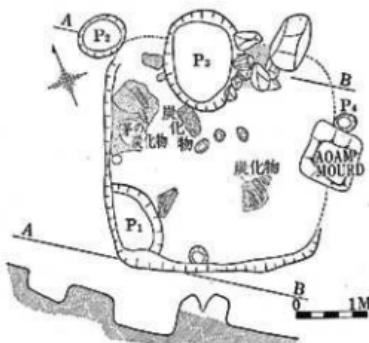
3. 平安時代

当期の遺構としては住居址2基とカマド址が発見されている。

遺物は遺構に伴うもののほかに、土師器の环が2個発見されている。

遺 構

イ) 第1号住居址（第38図、図版15, 22）



第38図 第1号住居址実測図 (S=1/80)

本住居址は第Ⅱ地区、0—D区の西に発見されたものである。

砂質ローム層を約30cmほど掘り込んで構築されているが、北側から東側にかけては擾乱によって壁は破壊されている。

プランは隅丸方形、大きさは南北3.7m、東西3.3m前後を測ると思われる。

床面は砂質ローム層のタキでカマドの付近は特に固い。しかしながら木の根によって搅乱され凹凸は激しい。

柱穴は定かでない。 P_1 は浅く、 P_2 は壁外である。 P_3 はカマドの北にあり自然石がみられる。機能は不明である。

カマドは北側や東寄りにあり、石心粘土製である。焚口両側に花崗岩を立てて袖石とし、平坦な天井石をのせている。

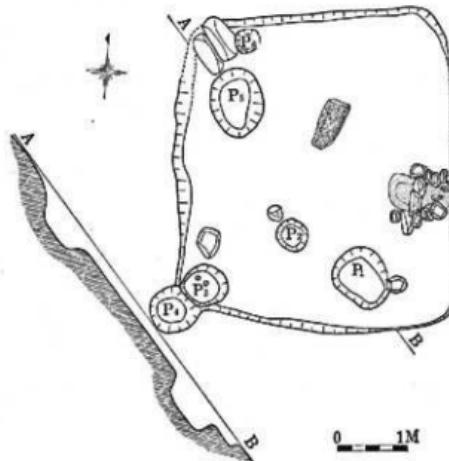
床面よりわずかに浮いて柱に使用したと思われる材木や茅の炭化したもの、更に焼土が多量に発見されている。炭化材は全体に西向きに倒れ込んでいる。火災にあった住居址と考えたい。

遺物はカマドのすぐ西に上部器の甕（第41図-1）が伏さった状態で出土し、西壁ぎわより須恵器の壺形土器の破片が出土している。

なお、カマドの東側に平面は方形、断面は台形状のロームマウンドが発見された。マウンドの頂部及び斜面は固くたたかれている。当住居址に伴うものなのか、遺物はまったく出土せず、不明である。（小池政美）

□ 第2号住居址（第39図、図版16、23、24）

当住居址は第Ⅰ地区、V—A区に発見されたものである。南には小川が流れ、北と西は高く、低温



第39図 第2号住居址実測図 (S=1/80)

地となってじめじめとしている。

このためローム層の堆積はあまり顕著でなく、遺構は黒褐色土に構成されているため、壁及び床面の検出は非常に困難をきわめた。

プランは隅丸方形を呈し、南北4.6m、東西4mを測る。壁高は15cm前後で東ではなくて西である。床面はじめじめとし軟弱である。

柱穴はP₁、P₂、P₃と思われるが、北東部には検出できなかった。

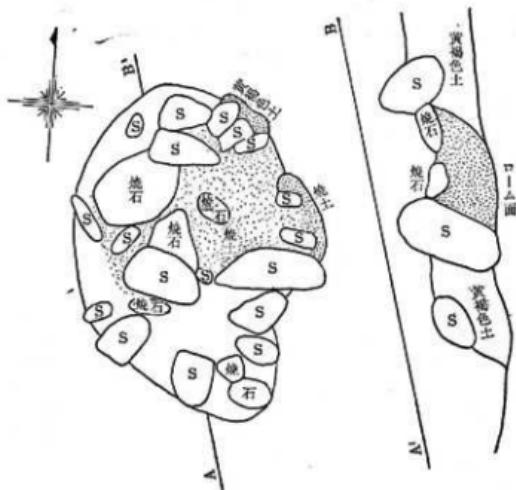
カマドは東側中央にあり、石心粘土製である。内部は舟底状に掘られ東に向かってゆるやかであるが上傾し、煙道となっている。焚口は大きな花崗岩を軸石にし、細長い天井石が乗っている。焼土が内部に充満し、土師器、須恵器片が出土した。

床面よりわずか浮いて炭化材と炭化した茅が少量であるが出土した。

遺物はカマドの付近に集中してみられたが、器形を知り得るもの少なく、土師器の坏（第41図-2）と須恵器の坏（第41図-3）だけである。灰釉は出土していない。（吉村 達）

ハ) カマド址（第40図）

第1号住居址の東、0-D-6, 7に発見されたものである。



第40図 カマド址 実測図 (S=1/20)

南北1.2m、東西0.9mの梢円形の中に、こぶし大から人頭大ほどの花崗岩が20数個不規則にみられる。中央部は厚く焼土が堆積し、石は熱を受けてぼろぼろとなっているものもみられる。

焼土の周りは花崗岩を粘土混じりのローム土を貼り付けて補強してある。

焼土の内部より土師器の瓦片が出土しており、カマドと考えたい。

この付近は自然石の流入や木の根の擾乱が激しく住居址のプランは確認できなかった。しかしこれに伴うものかは不明であるが、カマド址の東約5mほどの所に柱穴址が確認されている。(小池政美)

遺物(第41図、図版51)

出土した遺物は変形土器と杯形土器である。

1は第1号住居址より出土したもので土師器の変形土器である。底部は口縁部に比較して大きく、全体にすんぐりしている。頭部は短く口縁は強く外反する。胴央部やや上に最大径を持つ。

口肩部は薄くなる。

胎土は緻密で茶褐色を呈する。

ロクロ整形手法は認められず、調整はハケを用い横ナデに行われている。

2, 3は第2号住居址より出土したものである。

2は上部器の杯形土器で底部から直線的に口縁に至る。口唇は1回様薄くなる。口縁部下と底部付近にはわずかに稜を持つ。

胎土はち密で黄褐色を呈し、ロクロ整形が行われ、糸切り痕がみられる。

内部は黒磨が行われている。

3は須恵器の杯形土器で、そぎ状の口唇からゆるいカーブで底部に至る。

胎土中には砂粒を含み、きめは粗い。

淡い青色を呈し、整形はロクロの使用によっている。

4は1-C-23グリットから出土した土師器の杯形土器である。

底部からややふくらんで口縁に至る。口縁はそぎ状をなす。

整形はロクロ使用による。

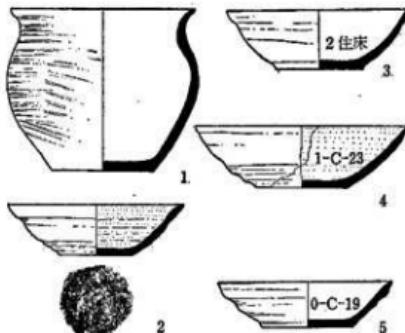
胎土中には砂粒をかなり含み、きめは非常に粗い。

5は0-C-19グリットから出土した土師器の杯形土器で、口唇部は丸味を持つ。

胸部と底部付近にわずかながら稜がみられる。

胎土は緻密で黄褐色を呈す。

ロクロ整形が行われている。(小池政美)



第41図 出土土器実測図(平安時代)(1/4)
1—1号住、2, 3—2号住、4, 5—グリット出土

4 その他の遺構及び遺物

時期不明の遺構3基、柱穴址1基、土壙2基が発見されているので、この項で報告しておくことにする。

イ) 柱穴址 (第 42 図)

第 1 号住居址、カマド址の東、0-D

-11、12 グリットに発見された。

砂質ローム層を掘り込んで大小 9 個のピットがある。比較的大きいもの P_1 、 P_2 、 P_3 、 P_4 、 P_5 と小さいものとに分けることができる。

ローム面は特別タタキが加えられたような形跡はない。焼土も検出されなかった。

遺物は上層より縄文時代早・前期の土器が出土している。これらの時期に属するものなのか、更に西にあるカマド址に付属するものなのか決め難い。(小池政美)

ロ) 第 1 号土壙 (第 43 図、図版 12)

柱穴址のすぐ東に発見されたもので、南北 2 m、東西最大幅 1 m、三角形を呈し、深さは 50 cm を測る。

西壁はかなりなだらかであるが東壁は直に近い。底面は平坦である。特別タタキなどはみられない。

土壙の東は、東西 80 cm ほどにわたって、ローム土が盛り上がり、マウンド状になっている。

墳頂は西から東にかけて下降し、極めて固くたたいてある。

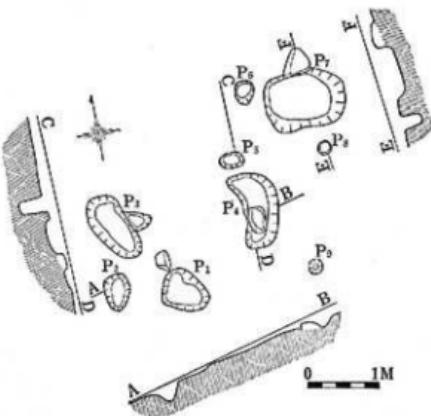
第 1 号住居址の南にも、若干の落ち込みを伴ったマウンドが発見されている。

遺物は付近から縄文時代早・前期の土器が出土しているが、遺構に伴うものはない。(小池政美)

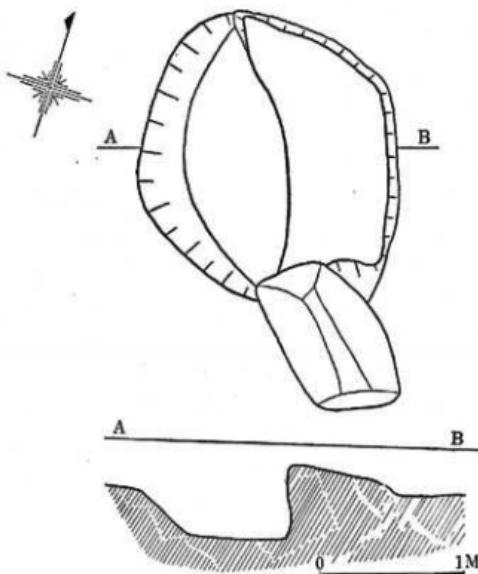
ハ) 第 2 号土壙 (第 44 図、図版

33)

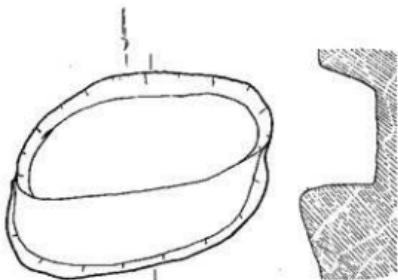
第 V 地区、第 1 号マウンドの西に



第 42 図 柱穴址実測図 (S=1/80)



第 43 図 第 1 号土壙実測図 (S=1/40)



第44図 第2号土墳実測図 ($S=1/40$)

い。付近より押型文上器が発見されている。

第1号同様、土墳を掘った際に、出た土をすぐ横に盛りあげたものと思われる。(吉村 進)

発見されたもので、形態は第1号土墳と同じである。

土墳は東西1.8m、南北最大幅0.8mで深さは約50cmを測ることができる。

底面は平坦である。タタキなどはみられない。

マウンド部は幅60cmほどで北から南に下降する。墳頂はやはり圓くたたかれていく。

遺物は内部からはまったく出土していない

第Ⅳ章 まとめ

第I~IV区のまとめ

本遺跡の調査は養命酒製造株式会社が、駒ヶ根市に新工場を建設するに当たっての、緊急発掘調査である。この調査を通して知り得た二、三の問題点について述べてみたい。

1. 本遺跡は中央アルプスの東麓中田切川の左岸に当たる位置にあり、洪積台地に崖壁断層が重なり合った特殊な地形である。

2. 遺跡地の標高は800~847mに分布する。遺跡の面積は東西400m、南北300mの広さと考えられる。今回の調査は工場の敷地となる箇所に限定して行われた。I~IV区までを友野が担当し、V~VI区は林が担当した。

3. 遺跡地の状況は、V区を除いてすべて山林でしかも、調査に先立つ伐採が行われたため、直径20~50cm内外の伐根があり、それを取り除くため一部はブルドーザーを使用した。

4. 調査の実質面積はI~IV区では158グリット 2528m^2 、V区では165グリット 656m^2 、VI区103グリット 412m^2 、全体面積 3596m^2 を調査した。

5. 地質の層序は、各地区毎に変化が激しく一定してはいないが、大方の標準を示せば表土10cm、黒色上層25~30cm、黒褐色上層10~15cmその下部がローム層である。遺物は黒色上層中に集中して発見されたが、黒褐色上層にも一部出土を見た。

6. 遺物発見箇所 a. 早期の遺物はI~IV区のO-B, C, D, I-B, C, D, III-D区、V区、H M-2~6, VI区Z31~34グリット、大徳坊森上の林道に面した箇所に発見された。b. 前期の遺物は、早期の遺物と判出した。特にI~IV区のうちO-C~Dを中心として出土した。c. 繩文中期の遺

物は C 区 - N に集中して発見されたが遺構はつい検出されなかった。

7. 土師式の遺物は I-C23, 0-C-19, 特 D-7~12 (第 1 号住居址), N-A-9, 10, 14, 15 グリット (第 2 号住居址) である。以上早期・前期・土師の出土箇所である。V・VI 区は林担当である。

8. 本遺跡においては早期の遺物の出土をみたので注意を払って調査したが、0-B, I-B グリット以外は前期と土師によって搅乱されたため層序的な面で出土遺物をとらえることはできなかつたが、0-B と I-B 区で若干調査が行われたので参考までに記しておく。地表下 53cm 黒褐色土層下に撚糸文土器が 1 片出土した。

押型文土器 (山型文) 45~53cm 下の黒色土層中から発見される。その比高差はわずか 8cm にすぎない。その 8cm 中に格子目文、橢円文土器が出土した。わずか 8cm の中では山型文・格子目文・橢円文の出土状態の区別は困難であった。

9. II 区に発見された早期の遺構について。

(1) 焼石炉 焼石炉という名称についてはいろいろ問題はあると思うが、ここでは焼石炉の名称を使うことにする。繩文早期の遺構として取り上げられたのは昭和 25 年 1 月夏島遺跡の時からである。夏島遺跡では炉のみ発見され、その外側に礫群が所在したと報告されている。炉址と礫群とは関連性があるという見解が述べられていると考えられる。大丸遺跡でも炉穴が認められたと報告されているが、礫が伴ったかどうかは不明である。関東以西では、愛知県岡崎市村上遺跡、大阪府中河内神宮寺遺跡、奈良大川遺跡からは円礫を野外に積んだ炉址が発見された。岡田茂弘氏は近畿地方においては、おそらく、早期を通じて野外の焼石炉を中心とした生活が営まれていたのではないかろうかと述べている。

この問題について故後藤守一氏も同じような意見を述べられている。

養命酒駒ヶ根工場内遺跡発見の焼石炉は、四方を焼けた自然石で囲んでありその中に焼けた礫が 110 個ほど詰まって発見された。その礫に混じって (第 11 図 1・6・8) の山型文が検出された。押型文期の焼石炉と考えることができよう。県内押型文遺跡の焼石炉 (集石炉) についてみると、樋沢遺跡では集石遺構が 20 箇所発見されているが、集石に木炭が付着しているというのみで石が焼けているのかどうか不明である。細久保・立野遺跡ではこうした報告はない。駒ヶ根市中沢横山遺跡では、枕大の石 10 個が配され中央が炉址状になり、内部黒土中より押型文土器が検出されたという。伊那市三つ木遺跡では、焼石炉と集石群が 31 箇所発見された。故藤森栄一氏は押型文時代のバーベキューだと焼石炉と集石群に対して述べられた。同市浜弓場遺跡からは焼石炉は発見されなかつたが焼けた集石群 2 箇所が発見された。

上伊那郡箕輪町荒野遺跡では、炉址を外にもった押型文期の遺構と調査者は考えられているようである。以上繩文早期を通じて関東のみならず中部から関東に及んで焼石炉 (集石群) が存在したことは事実である。この焼石炉、集石群 (赤石を含んだ) 遺構は最近の調査で早期のみではなく前期～中期まで続く様である。

(2) 小堅穴 本遺跡からは 2 個の小堅穴が発見された。1 号堅穴は長径 1.5m 短径 1m・深さ 60

cm 壁穴の周囲に径 10 cm 内外の小穴が 13 個発見された。この小穴は配列の状況からみて壁穴に対する一種の建築的柱穴と理解できる施設であると私は考えたい。第 2 号壁穴も同様のものである。

10. 遺物 繩文早期を I・II 群に分類した。I 群は織維を含まないもの、II 群は胎土中に織維を含む土器。第 I 群 a 類は山形文土器、色調は黒褐色、黄褐色、口縁部は一部内反しているが、多くは外反する。施文方法は縦位と横位に配した帶状、山形の幅は大きいものと小さい幅のもの、銳角なものと波長の長いものとがある。非常状施文への傾向がうかがわれる土器である。

鋸齒状文土器（第 12 図-26～28）縦位山形文と組合わせた押型文土器である。胎土にはわずか長石が含まれ焼成は良好である。この鋸齒状押型文土器の発見例は県内では養命酒駒ヶ根工場内遺跡以外には見受けられないようである。県外での例は昭和 11 年香川県小島貝塚の研究の中で、樋口清之氏が複合鋸齒文と呼ばれた類で、三角形を交互に組合せ、その各単位内を平行斜線をもって充填させたもので器面に横位に回転施文したものである。養命酒駒ヶ根工場内遺跡出土の上器と類似している。長良川流域九合洞穴の類に鋸齒状押型文が出上していると報じられている。現在その三例の外は報じられていない様である。この鋸齒状押型文分布範囲は、四国・中部地方に限っている様である。小島貝塚の例では山形文と梢円文に鋸齒状文が組合わせている。養命酒駒ヶ根工場内遺跡には梢円文の組合せは出土しない。また小島貝塚では、小島式土器と共に伴出する外、梢円文や山形連続文土器とも共存するという。この点養命酒駒ヶ根工場内遺跡の出土状況と類似している。九合洞穴では胎土中にわずかではあるが織維を混入するものも混じって発見された様である。鋸齒状文については資料も少ないので研究も不十分であるため今後の研究に力を注ぎたい。

b 類 格子目文土器、文様は全般的に整然としている。菱形や平行四辺形が多く無文帯を有しているものがある。柄沢には帶状がうかがわれる。細久保、立野、棚畠、三つ木、浜弓場の各遺跡には帶状の施文は見受けられない。この点養命酒駒ヶ根工場内出土の格子目文土器は柄沢に類似するように思われる。

c 類 梢円押型文土器 厚さは 5～10 mm、色調は黒褐色、黄褐色。文様は米粒形、ソロバン玉形、梢円の連鎖状等である。施文は縦位及び横位である。中には帶状をなすものも含まれている。細久保、三つ木、浜弓場遺跡には帶状は発見されていない。この点でも柄沢に関係が深い様に思われる。

第 II 群土器 a 類は撚糸文土器、色調は黒褐色、黄褐色、厚さは 5～10 mm、口縁部はわずかに外反する。口唇に指頭による押正痕がみられる。施文は器面全体に網状に施されている。撚糸文単独のものとは考えられないもの。

b 類は、表面に格状压痕文を施してあるもので、内面は擦痕が横走する土器で、関東地方の子母口式に比定できるもの。

c 類は、細隆起線、沈線、刺突文等の文様構成の土器、器内には貝殻条痕文が施されている。鶴ヶ島台式に比定できるもの。

d 類は、斜襯文土器、内面に擦痕のあるもの、色調は茶褐色、黒褐色、胎土中に長行を含み焼成は固い、茅山下唇式に比定できるもの。

d 類は、茅山上唇式である。

前期の土器 前期の遺物は 0—C～D に多く出土した。a 類は、薄手細繩文指痕土器の一群とヘラ状工具で刺突文、櫛状施文具が施されたもの。b 類は、複合の口縁部を持つ单節斜繩文土器、胎土中に纖維を含む前期初頭の土器と考えられる。c 類、d 類は爪型文土器で類例の少い土器、宮田村中越遺跡に出土している。胎土中に雲母が含まれている。e 類は纖維が含まれていない。f 類は、神ノ木式に類似する土器である。f 類は、斜繩文で纖維を含む黒浜式に比定できる土器。

g 類は、斜繩文を地文とし半截竹管による沈線を加えた諸式に比定されるもの。h 類は、繩文地に爪形文を持ち粘土紐を施したもの、隆線文に連続爪形文を施した土器等である。関東地方十三菩提式に比定できる七器。i 類は半截竹管による平行沈線がみられるもの、下島直後式に当る。j 類は、地文は繩文で、その上に粘土紐を使ってある関西系土器で前期末大巣山式に類似している。

石器はすでに述べたように繩文時代早・前期に属するものであるが、その層位的関係はとらえることができなかった。種類からみるとスクレーバー状石器の卓越が知られ、次いで石鏃である。石匙は小形の調整の丹念なものである。(友野良一)

第V区・第VI区の遺構について

当地区は広大な養命酒工場敷地の最東北部分を占めており、山麓の扇状地の扇側部にあたる西部の高所即ち第VI区から繩文中期集落址が、東の第V区の平坦に近い傾斜面からマウンド状遺構群が出土したので、この二つについて所見を述べてみたい。

まず、第VI区の繩文中期集落址についてであるが、わずかに共伴した上器片からみると繩文時代中期の終末に属する時期と認められる。県内においては比較的よく編年が乗っているハケ岳南麓地方の遺跡と比較すると「曾利Ⅲ式」に比定できよう。竪穴式住居址のプランは平均して一辺 6m×5m 内外の隅丸長方形で、壁が定かでないものが多いが、これは黒土に混入した土層中に設けられたため壁の認定が比較的困難であったからである。またこの時期に特有の埋甕も見当たらず、床面も疊層を握りあげたままの状態で極めて不整で凹凸が激しい。また伊の構築も床面の疊を適当に配した程度で、たって簡素である。これらの状況から永く使用した堅穴ではなく、ごく一時的なものと考えてさしつかえあるまい。ローム層の少ない疊原の扇状地は、植生も豊かでない。ある一時期に、彼ら繩文中期人の生活に魅力のある資源が存在し、それを目的に一時期の生活を営んだ眞跡といふことができる。その生活の手段は何であったろうか。狩猟ということも考えられるが、彼らの狩猟具として唯一の道具である石鏃は一個も出土していない。

これは第I区から第IV区に出土した繩文早期及び前期の遺構から多くの石製利器を出土したのと極めて対照的でさえある。本竪穴住居址群に伴った石器はわずかな石斧(打製石斧を主とし、若干磨製ありだけ)であり、これだけからみると根葉類の採集にあったのかも知れない。この決定は将来に待とう。ここでは、数多い上伊那の繩文中期集落址に比べてその立地が扇状地の疊原であったことにその特徴を見い出すことができる。また集落の特徴としては、東北に向かう平坦な斜面に北から 8 号址、6 号址、7 号址とやや弧をなして 5m、10m 間隔で並び、その北東 30m に 5 号址があり、さらに約 50m 東方の第V区西限に 4 号、3 号址が北東方向に並列している。この分布状態から

みると併し 50m の環状を呈し、相当大きな環状集落を形成していたことが推定できるのである。上伊那の地域で同期の集落址が発見されたのは、当地域では大城林遺跡¹¹、飯島町鳴尾天白遺跡¹²及び追越遺跡¹³、伊那市月見松遺跡¹⁴及び御殿場遺跡¹⁵等々極めて数が多い。これらはいずれも環状もしくは半環状の集落を形成しており、当遺跡もほぼこれらと同様の形態を持つものと考えたい。

当集落址の特徴を要約すれば、標高 800m の山麓の扇状地のしかも疊原に営まれたことで、ヒンターランドの貧しさのためか定住することができずにやがて廃棄される運命にあった遺跡であろう。その反面、繩文中期人の活動範囲のおお盛さをもの語っているのである。

第 2 は第 V 区に発見されたマウンド状遺構についてである。この遺構は第 V 区約 4,000 平方メートルの中央部に 7 箇所発見されその分布範囲は約 160 平方メートルであった。分布状況は北西方向から南東方向にかけて平均 6m 間隔にやや弧状をなして展開する。マウンドの大きさは大小さまざまであるが、環状に溝を掘り、その掘りあげた土を中央に積みあげたものと思われるが、黒色土と疊の混合土層であるために堆積状態は明確にしない得ない。プランは橢円及び卵状、長橢円形があるが、第 4 号址は最も大きく長径 6m、短径 5m を測り、第 6 号址は最も小さく長径 3m、短径 1.5m で、他はこの 2 号の中間のサイズを持つ。形態を簡約すれば橢円状を呈する溝を掘り、その掘りあげ土を中心部に盛って卵形のプランにマウンドを形成したもので卵形の頭部は溝が狹少になるか、または全く溝がなく外周の面と接続するかである。この部分に比較的大きな石を一個配置する態のものである。マウンドが主体部になるのか溝が主体になるのか判然としない。マウンド内には何らの構築の痕跡も全く認められず、溝内から若干の土器片をだすからである。この遺構の所属時期については確定的決め手はない。当遺跡の場合からみれば、西方 20m から 100m に前述の繩文時代集落址が存在するが、マウンド内からは弥生時代中期初頭の土器片が出土しているのみで、繩文中期の土器は全く認められない。まず、弥生時代の遺構とするのが適当であろう。出土した土器片は、中川村刈谷原遺跡出土の水神平式土器に比定することができる。隣接地域では松本市横山城遺跡¹⁶、天竜川上流の源訪瀬北岸の庄の畠遺跡出土第 4 類土器¹⁷に類するものであり、天竜川下流では、飯田市寺所遺跡¹⁸、疊丘村林里遺跡¹⁹があり、いわゆる弥生時代中期最初頭に位置づけることができる。このマウンド状遺構を弥生中期初頭のものと仮定すれば、何の使用目的をもって構築されたものであろうか。前述の構築状況からみた場合この溝が問題になり、土壌に類するもの、更に想像すれば埋葬施設とも考えられるが証拠はまったくない。類例をあえて求めれば、ローム層を環状に溝を掘りめぐらし中央にロームを堆積させたいわゆるローム・マウンドがある。これは中央道の大門原 B 遺跡²⁰、同宮崎 A 遺跡²¹、高森町月夜平遺跡²²等に発見されており、発見者はこの所属時期について「繩文早期より新しく、弥生後期より古い時期の所産」と、かなり長い時期にわたって定めている。しかしこの三遺跡のロームマウンドに近接して出土した遺構はすべて弥生後期の堅穴住居址群のみであり、ほぼ弥生時代の所産と仮定してよいと思われる。形態やプランも本遺跡と類似しており、円形、長橢円形、卵形で遺物はまったく出土していない。当遺跡は若干ながら遺物を伴っている点、初見として良いであろう。この水神平式土器に統く続水神平式土器が当駒ヶ根市内においては最近、大城林遺跡特殊遺構 3, 4²³から

単独に出土し、さらに北方Ⅰ遺跡の柱穴群遺構^{注14}に伴って出土している。

これら的情勢からみると、弥生式文化が天竜川をさかのぼって波及する時期において、当属状地より低位の近接地点、恐らく辻沢地籍であろうが、ここに居を構えた中期初頭の弥生人たちが、祭礼、埋葬等呪術を伴う儀礼の場を本地点に設定し遺構を営んだものであろう。西に駒ヶ岳の巣峯の白銀を仰ぎ、東にはるかに波うつ赤石山脈の絛模をのぞむこの地点は、辻沢川の最上流地にあたるからである。

以上発掘の所見を記したが、この遺構の性格については、新資料の増加を待って決定すべきものであることは論を待たない。

(林 茂樹)

注 1 「黒岩は場整備事業火田切地区(昭和47・48年度分)埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」駒ヶ根市教育委員会 昭和49年

注 2 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡飯島町地内その1—昭和46年度」長野県教育委員会 昭和47年

注 3 注2と同じ

注 4 「月見松遺跡緊急発掘調査報告書」伊那市教育委員会 昭和43年

注 5 「伊那市御殿場遺跡緊急発掘調査報告書」伊那市教育委員会 昭和41年

注 6 藤沢宗平「長野県松本市横山城遺跡」信濃 18-7

注 7 「岡谷市庄の畠遺跡」長野県考古学会研究報告 1

注 8 神村 透「飯田市寺所遺跡とその考察」長野県考古学会誌 4

注 9 神村 透「豊丘村林里遺跡」長野県考古学会誌 4

注10 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯田地区—昭和45年度」長野県教育委員会 昭和46年

注11 注10と同じ

注12 「月夜平」高森町教育委員会 昭和44年

注13 注1と同じ

注14 注1と同じ



図版1 大徳原上空より遺跡を望む



図版2 西方山腹より遺跡を望む



図版3 遺跡よりみた南駒ヶ岳



図版4 遺跡と山地



図版5 第Ⅰ区の景観(発掘前)



図版6 第Ⅱ区の景観(発掘前)



圖版7 第Ⅲ區全景



圖版8 第Ⅳ區全景



図版9 発掘風景



図版10 第1号・2号竖穴と流石群（第Ⅱ区）



圖版 11 流 石 群 (第Ⅱ区)



圖版 12 第 1 号土壤と流石群



図版13 焼石炉と流石群



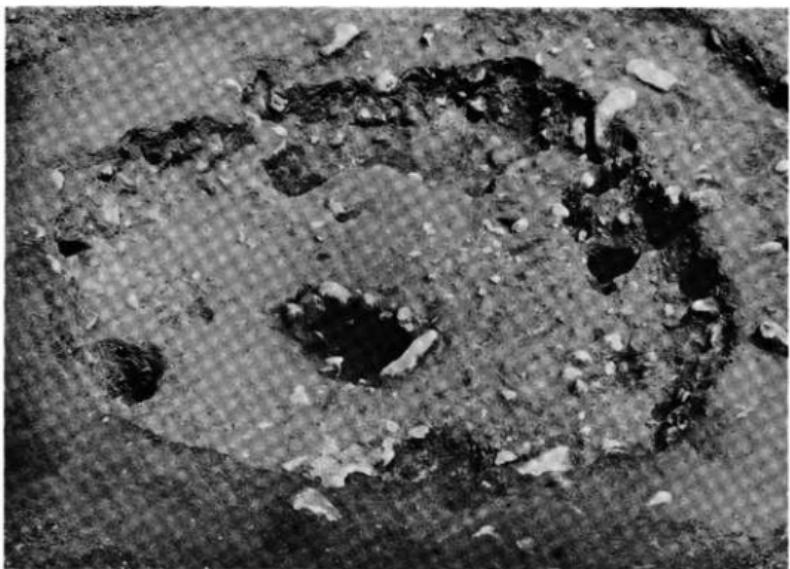
図版14 第1号・2号堅穴と流石群



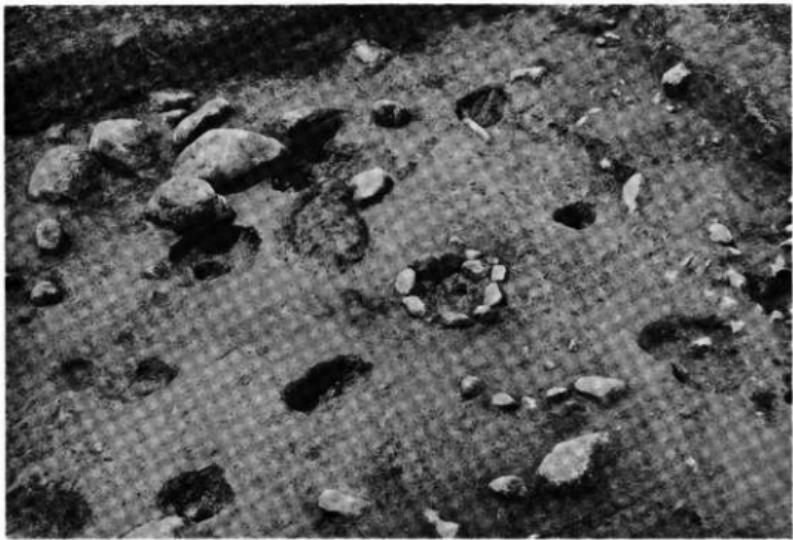
圖版 15 第 1 號 住居址



圖版 16 第 2 號 住居址



圖版 17 第 3 号住居址



圖版 18 第 4 号住居址



圖版 19 第 5 号住居址



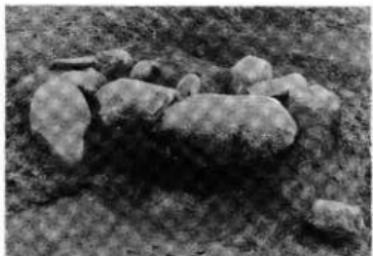
圖版 20 第 7 号住居址



図版 21 第 8 号住居址



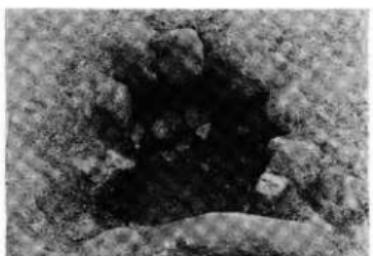
図版 22 第 1 号住居址カマド



図版 23 第 2 号住居址カマド



図版 24 第 2 号住居址カマド



図版 25 第 3 号住居址炉址



図版 26 第 4 号住居址炉址



図版 27 第 6 号住居址炉址



図版 28 第 8 号住居址炉址



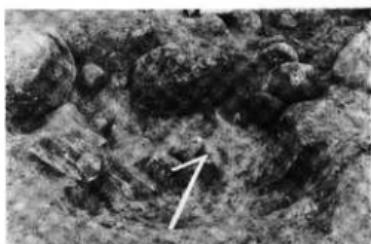
図版 29 第 1 号窓穴



図版 30 第 1 号窓穴



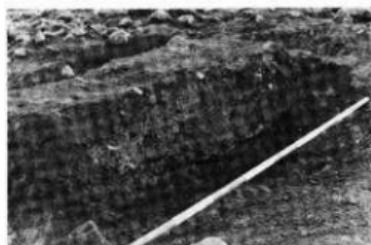
図版 31 焼石炉



図版 32 焼石炉掘り込み後



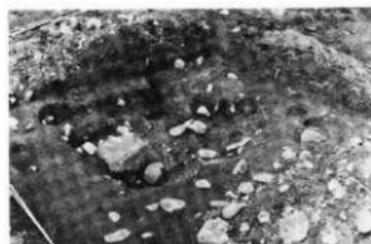
図版 33 第 2 号土壙と第 1 号マウンド



図版 34 第 1 号マウンド



図版 35 第 2 号マウンド



図版 36 第 3 号マウンド



図版 37 第 4 号 マウンド



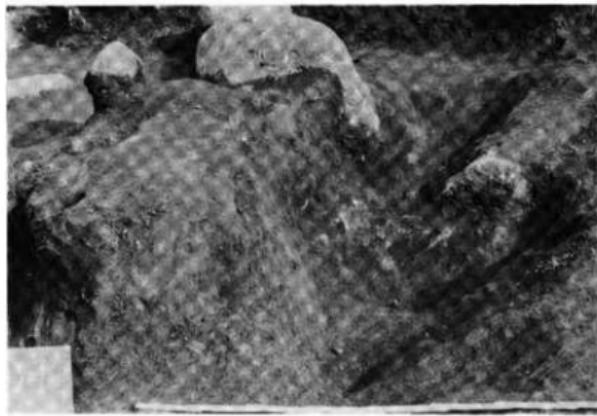
図版 38 第 4 号マウンド



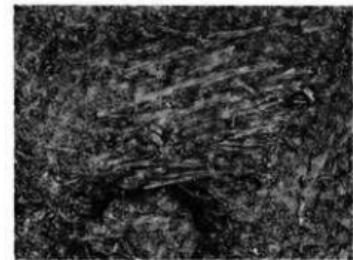
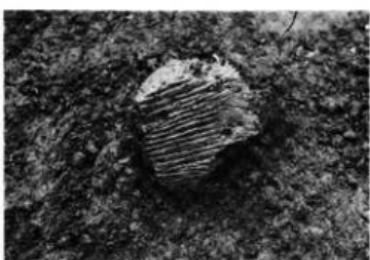
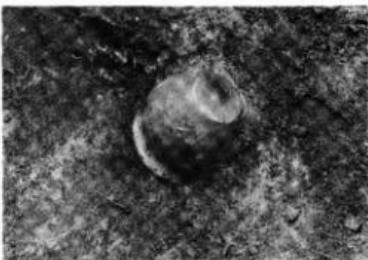
図版 39 第 4 号マウンド



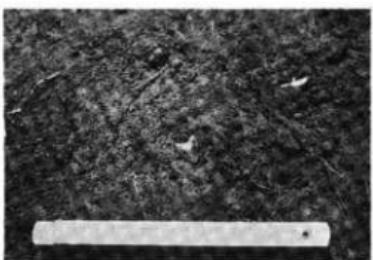
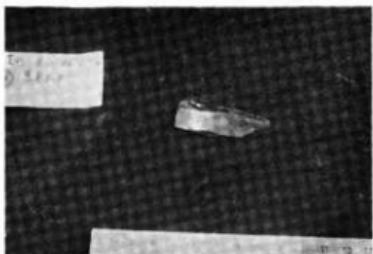
図版40 第5号マウンド



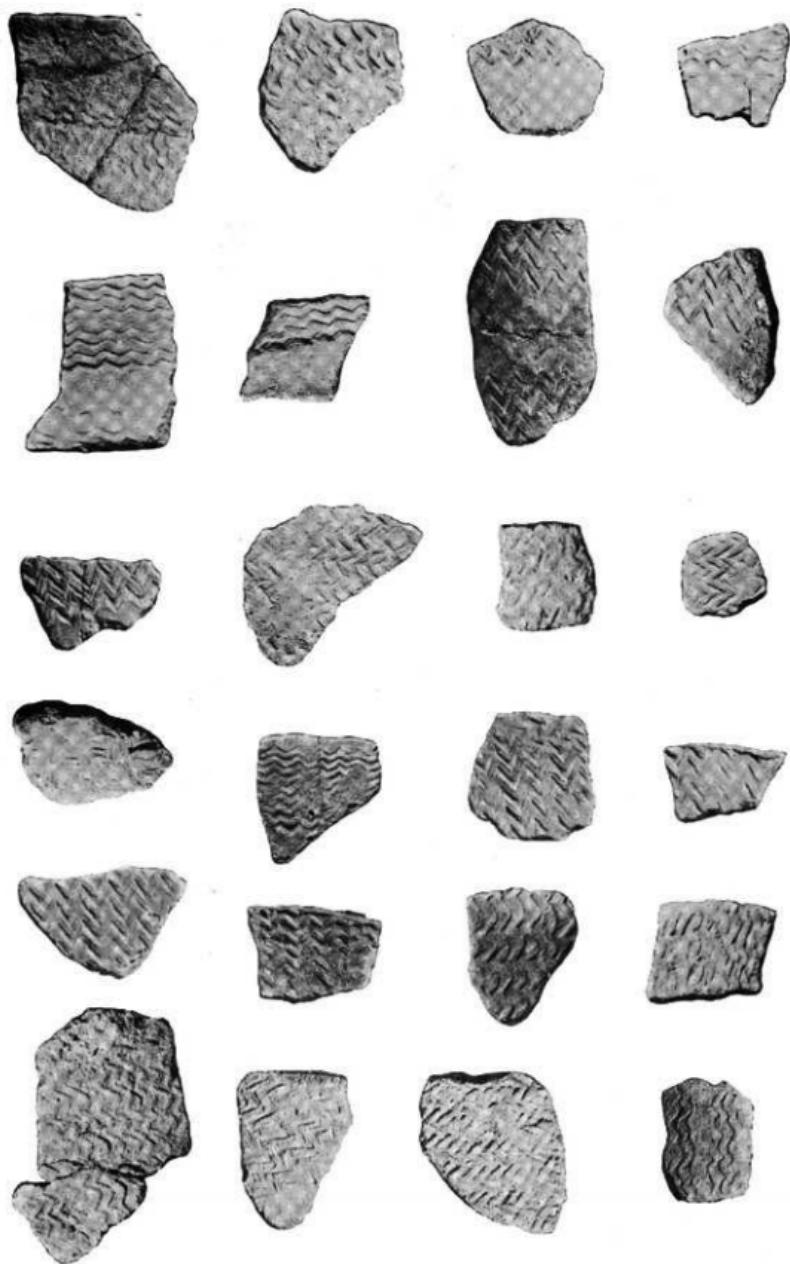
図版41 第6号マウンド



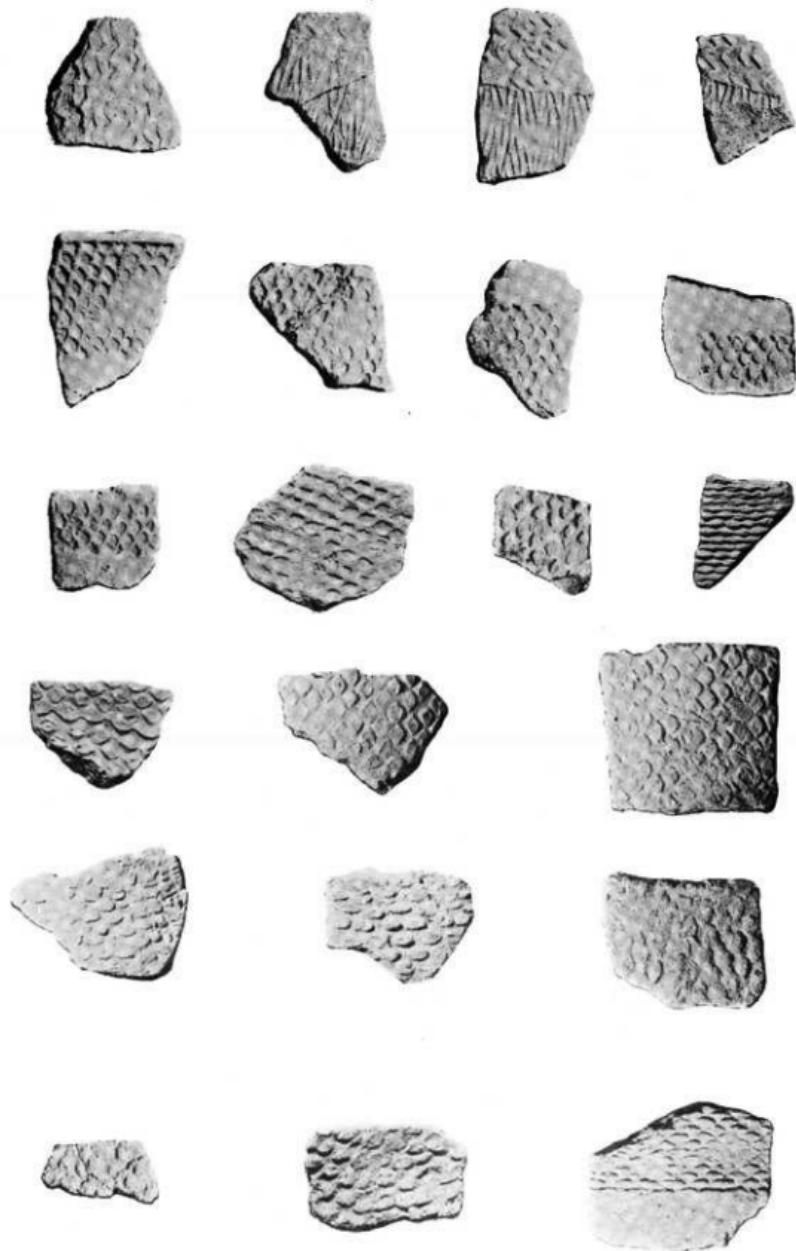
圖版 42 遺物出土狀態



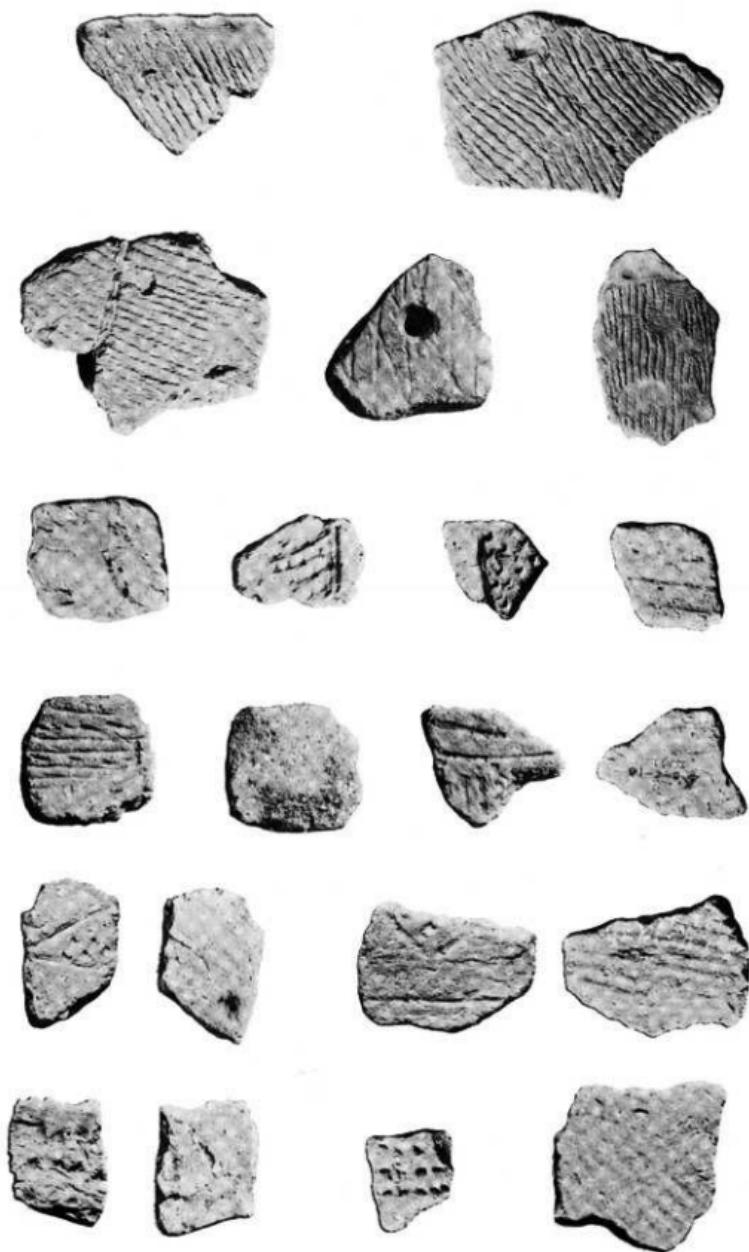
圖版 43 石 器 出 土 狀 態



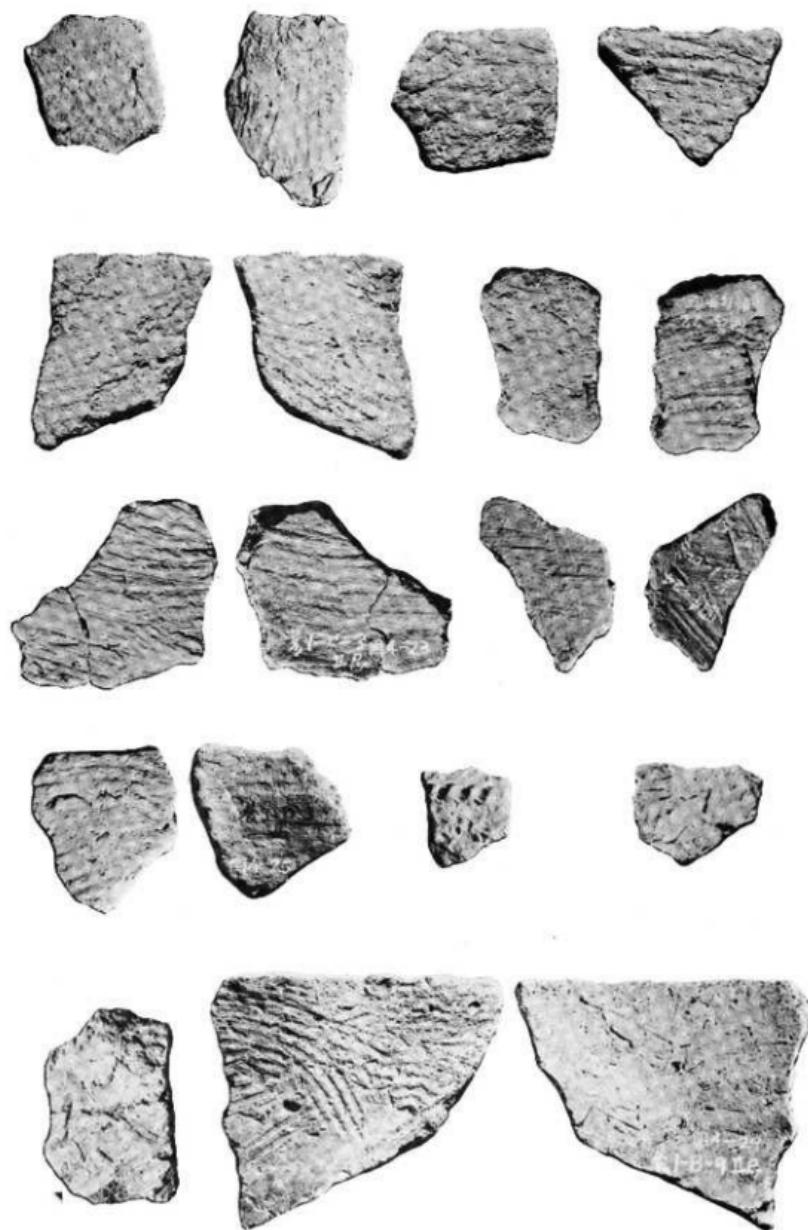
圖版 44 出土土器(繩文時代早期第 1 群)



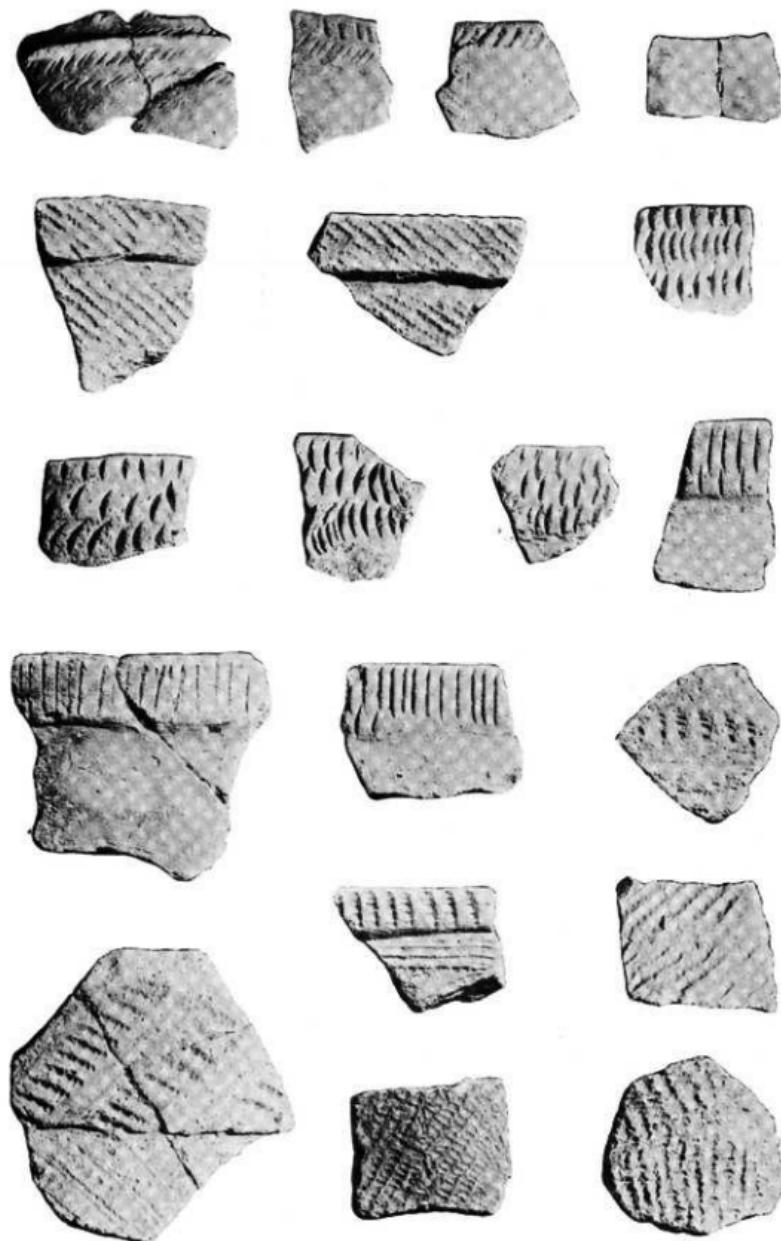
圖版 45 出土土器(縄文時代早期第Ⅰ群)



圖版 46 出土土器(羅文時代早期第Ⅱ群)



圖版 47 出土土器(繩文時代早期第二群)



図版48 出土土器(縄文時代前期)



圖版 49 出土土器(籀文時代前期)



圖版 50 出土土器(弥生時代)

